古今和歌集

やまとうたは人のこゝろをたねとしてよろつのことのはとそなれりける世中にある人ことわさしけきものなれは心に思ふ事を見るものきくものにつけていひいたせるなり花になくうくひす水にすむかはつのこゑをきけはいきとしいけるものいつれかうたをよまさりけるちからをもいれすしてあめつちをうこかしめにみえぬおに神をもあはれとおもはせをとこ女のなかをもやはらけたけきものゝふの心をもなくさむるは哥なりこのうたあめつちのひらけはしまりける時よりいてきに

けり（あまのうきはしのしたにてめかみをかみとなりたまへる事をいへるうた也）しかあれとも世につたはることはひさかたのあめにしてはしたてるひめにはしまり（したてるひめとはあめわかみこのめなりせうとのかみのかたちをかたにうつりてかかやくをよめるえひすうたなるへしこれらはもしのかすもさたまらすうたのやうにもあらぬ事とも也）あらかねのつちにてはすさのをのみことよりそおこりけるちはやふる神代にはうたのもしもさたまらすすなほにしてことの心わきかたかりけらし人の世となりてすさのをのみことよりそみそもしあまりひともしはよみける（すさのをのみことはあまてるおほん神のこのかみ也女とすみたまはんとていつもの国に宮つくりしたまふ時にその所にやいろのくものたつをみてよみたまへる也）

やくもたついつもやへかきつまこめに
やへかきつくるそのやへかきを　かくてそ花をめてとりを
うらやみかすみをあはれひつゆをかなしふ
心葉おほくさまさまになりにけるとをき所
もいてたつあしもとよりはしまりて年月を
わたりたかき山もふもとのちりひちよりなりて
あまくもたなひくまておひのほれるかことくに
このうたもかくのことくなるへしなにはつの
うたはみかとのおほんはしめなり　みかとおほさゝきのみこと乃
なにはにいましてみこときこ
えけるときに東宮をたかひにゆつりてくらゐにつき給は
て三年になりにけれは王仁といふ人のいふかしおもひてよみて奉
りける哥也　この
花は梅の花をいふなるへし　あさか山のことの葉はうね

めのたはふれよりよみて　かつらきのおほきみをみちのおくへ
つかはしたりけるにくにのつかさことおろそかなりけれはまうけなとしたりけれとすさましかりけれはうねめなりける女のかはらけとりてよめるなりこれにそおほきみの心とけにける
この二うたは哥の父母のやうにて
そてならふ人のはしめにもしけるそもそもうたの
さまむつなりからのうたにもかくそあるへきその
むくさのひとつにはそへうたおほさゝきのみかと
をそへたてまつれるうた
なにはつにさくやこの花冬こもり
今はゝるへとさくやこの花といへるなるへし
ふたつにはかそへうた

さくはなにおもひつくみのあちきなさ
身にいたつきのいるもしらすて といへるなるへし
これはたゝことにいひてものにたとへなともせぬものなり このうた
いかにいへるにかあらんそのこゝろえかたし
いつゝにたゝことうたといへるなんこれ
にはかなふへき
三にはなすらへうた
君にけさあしたの霜のおきていなは
恋しきことにきえやわたらむ といへるなるへし
これはものにもなすらへてそれかやうになむあると
やうにいふなり このうたよくかなへりともみえす たらちめの
おやのかふこのまゆこもりいふせくもあるかいもにあはすて
かやうなるやこれにはかなふへからむ
よつにはたとへうた

我恋はよむともつきしありそ海の
濱のまさこはよみつくすとも といへるなるへし
これはよろつの草木鳥けたものにつけて心をみするなり この歌は
かくれたる所なんなき されとはしめのそへうたとおなしやうなれは
すこしさまをかへたるなるへし 須磨のあまのしほやく煙風をいたみ
おもはぬかたにたなひきにけり この歌なとやかなふへからむ
いつゝにはたゝことうた
いつはりのなき世なりせはいかはかり
人のことの葉うれしからまし といへるなるへし
これはことのとゝのほりたゝしきをいふなり この歌のこゝろさらにかなはす
とめうたとやいふへからん 山さくらあくまていろをみつるかな花ちるへくも
風ふかぬ
よに
むつにはいはひうた

このとのはむへもとみけりさきくさのみつは
よつはにとのつくりせりといへるなるへし
これは世をほめて神につくるなりこのうたいはひうたとはみえすなむ
ある　春日野にわかなつみつゝよろつよをいはふ心は神そしるらむ
らんこれらやすこしかなふへからむおほよそ
むくさにわかれむことはえあるましきことになむ　今乃世中いろに
つき人のこゝろ花になりにけるよりあたなるうた
はかなきことのみいてくれはいろこのみの家に
むもれ木の人しれぬことゝなりてまめなる所には
花すゝきほにいたすへき事にもあらすなりにたり
そのはしめをおもへはかゝるへくなむあら
ぬいにしへのよゝのみかと春の花のあした秋の月

乃よことにさふらふ人ゝをめしてことにつけ
つゝうたをたてまつらしめ給ひあるは花をそ
ふとてたよりなき所にまとひあるは月をお
もふとてしるへなきやみにたとれる心ゝゝをみ
給ひてさかしおろかなりとしろしめしけむしかあ
るのみにあらすさゝれ石にたとへつくは山に
かけてきみをねかひよろこひみにすきたのし
ひこゝろにあまりふしのけふりによそへて人をこひまつ
虫乃ねにともをしのひ高砂住の江の松もあ
ひおひのやうにおほえ男山のむかしをおもひ

出てをみなへしの一ときをくねるにも哥をいひ
てそなくさめける又春のあしたに花のちるを
み秋の夕くれにこの葉のおつるをきゝあるは
としことにかゝみのかけにみゆる雪と浪とをなけ
き草の露水のあわをみてわか身をおとろかしある
はきのふはさかへおこりて時をうしなひ世にわひ
したしかりしもうとくなりあるは松山の波をかけ
野中の水をくみ秋萩のしたはをなかめあかつきの
しきのはねかきをかそへあるはくれ竹のうき
ふしを人にいひよしの河をひきて世中をうらみ

きつるに今は富士の山も煙たゝすなりなからの
はしもつくるなりときく人は哥にのみそ心を
なくさめけるいにしへよりかくつたはるうちにも
ならの御時よりそひろまりにけるかの御
世や哥の心をしろしめしたりけんかの御時に
おほきみつのくらゐかきのもとの人丸なん哥
のひしりなりけるこれは君も人も身をあはせたりと
いふなるへし秋の夕たつた河になかるゝもみ
ちはみかとの御めに錦とみたまひ春の
あしたよし野の山のさくらは人まろか心には雲

のとなんありける又山のへ乃あか人といふ人あり
けり哥にあやしくたへなりけり人まろはあか
人かうへにたゝんことかたくあか人は人まろかしも
にたゝんことかたくなんありける ならのみかとの御うた 龍田
河もみちみたれてなかるめり
わたらは錦なかやたえなん 人まろ 梅花それともみえす久かたのあまきる
雪のなへてふれゝは 又 ほの〳〵とあかしのうらの朝きりに嶋
かくれゆく舟をしそおもふ 赤人 春ののにすみれつみにと
こしわれそのをなつかしみ一夜ねにける わかのうらにしほ
みちくれはかたをなみあしへを
さしてたつなきわたる
この人〳〵をおきて又すくれたる
人もくれ竹の世〳〵にきこえかたいとのよりよりに
たえすそありけるこれよりさきの哥をあつめ
てなん万えふしふとなつけられたりける

こゝにいにしへ乃ことをも哥のこゝろをもしれる人
わつかにひとりふたりなりきしかあれとこれかれ
えたるところえぬところたかひになんあるかの御時
よりこのかた年はもゝとせあまり世はとつきにな
りけるいにしへの事をも哥をもしれる人よむ
人おほからす今このことをいふにつかさくらゐたか
き人をはたやすきやうなれはいれすその
外にちかき世にその名きこえたる人はすなはち
僧正遍昭はうたのさまはえたれともまことすくなし
たとへはゑにかけるをうなをみていたつらに心を

うこのはゝしゝし　あさみとりいとよりかけて白露を玉にもぬける
春の柳かこれは紫乃さとにしまれにかくて
白かつらは房にありしあるさかの野にて馬よりおちてよめる
名にめてておれるはかりそ女郎花われおちにきと人にかたるな
ありはら乃なりひらはそのこゝろあまりてことはたらし
しほめる花の色なくてにほひのこ
れるかことし　月やあらぬ春やむかしの春ならぬわか身ひとつは
もとの身にして　おかしきは月やあかしにけれは
うこ乃ほとれは人のおもしろきもの　ふかくさの帝を
さしてよめるかにはやはしるにこそわかきさする
ふんやのやす
ひてはことはゝたくみにてそのさま身におはすい
はゝあき人のよききぬきたらんかことし　吹からに
秋の草木のしをるれはむへ山風をあらしといふらん　深草のみかとの
御国忌に　草ふかき霞の谷にかけかくしてる日のくれしけふにやはあらぬ　宇
治山の僧きせんはことはかすかにしてはしめをはり
たしかならすいはゝ秋の月をみるにあかつき
乃くもにあへるかことし　わかいほはみやこのたつみしかそすむ
世をうち山と人はいふなり
よめるうたおほくきこえねはかれこれをかよはして
よくしらす小野の小町はいにしへのそとほり
ひめの流なりあはれなるやうにてつよからす
いはゝよきをうなのなやめる所あるにゝたり
つよからぬはをうなのうたなれはなるへし　おもひつゝ
ぬれはや人のみえつらん
乃みえけん夢としりせはさめさらましを　色みえてうつろふものは
世中の人の心の花にそありける　わひぬれは身をうきくさのねをたえて
さそふ水あらはいなんとそおもふ　そとほりひめの歌　わかせこか
くへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも
大伴乃くろぬしはそのさまいやしいはゝたきゝおへる

やま人の花のかけにやすめるかことし　思ひ出て恋
しきときは
はつかりのなきてわたると人はしらすや　鏡山いさたちよりて　この
みてゆかむとしへぬる身はおいやしぬると
ほかの人〱その名きこゆる野へにおふるかつら
のはひひろこりはやしにしけき木の葉のことく
におほかれとうたとのみ思ひてそのさましらぬ
なるへしかゝるにいますへらきのあめのしたしろ
しめすことよつのときこゝのかへりになむなりぬる
あまねきおほむうつくしみの浪や
しまのほかまてなかれひろき御めくみのかけ
つくは山の麓よりもしけくおはしまして

よろつのまつりことをきこしめすいとまもろ
〱のことをすてたまはぬあまりにいにしへの事
をもわすれしふりにしことをもおこしたまふとて
今もみそなはし後の世にもつたはれとて延喜
五年四月十八日に大内記きのとものり御書の
ところのあつかりきのつらゆきさきのかひのさう
官おふしかうちのみつね右衛門の府生みふのたゝ
みねらにおほせられて万えふしふにいらぬふるき
うたみつからのをもたてまつらしめ給
ひてなむそれかなかにむめをかさすよりはしめて

りょうすれはきつしもみちをわけ雪はみるにいふなる
かく又けるの哥よりきこゆる思ひ人をもい
ひは姫もこ夏草をみくりよはこひあふぎの
山にいちつてきしけをいひてあつは春夏妹冬もおも
いく思草くの哥をなしえくはそくなるへけらす
てなうくもくよ死なるしけく古今つのしぬとみ
つくこのつはわりかえていはれて山しき氷のつき
すりなきのまさこのうすおかくりもてき思はいはなき
あすつていはのせをなまうつみともきていさつれ
ふるのいりかとなまよまつてはのとうあつへなそれ

枕草紙は君の花にけにはすくなくしくきすよ
名のと妹のくへなりこをとしてられはかけいは人への
みにおもひとしりは哥のはにもちち思へとさなむく
思ひのちりぬなるくしつのみさるけいしりきつつ
この世にあはしくしよれてこの事の所よあへるは
あんよるこは思ふ人をまつなくなむあきにさ歌の
しらて梅花なるのしくは時なり事さりきを
乃ときうすいはゆきつつふとしこのうくへもとすかと
やわはやきのいりしぬしす松のしへ数うさはして
ゆきき乃つけなるつけるいろそうものわてもさし

くらつまみ程は頭のさ毎をとしとしのくらゐ
さらむ人はおかしくの月ぬみなこくくあはれ
へをおしふては月をこしいさゝ見たり

古今和歌集巻第一

春哥上

ふる年に春たちける日よめる

在原元方

年乃内に春はきにけりひとゝせをこそとやいはむ今年とやいはむ

春たちける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすひし水のこほれるを春たつけふの風や解らん

題しらす

讀人しらす

春霞たてるやいつこみよしのゝ吉野の山に雪はふりつゝ

二条のきさきの春のはしめの御哥

雪乃内に春はきにけり鶯のこほれる涙いまやとくらん

題しらす

よみ人しらす

梅かえにきゐる鶯春かけてなけともいまた雪は降つゝ

雪乃木にふりかゝれるをよめる

素性法師

春たては花とやみらむ白雪のかゝれる枝に鶯のなく

題しらす

よみ人しらす

心さしふかくそめてしおりけれは消あへぬ雪の花とみゆらん

ある人のいはくさきのおほいまうちきみの哥なり

二条后のとう宮のみやすん所ときこえける
時正月三日おまへにめしておほせことあるあひ
たに日はてりなから雪のかしらにふりかゝりける
をよませ給ける　文屋やすひて
春の日のひかりにあたる我なれとかしらの雪となるそわひしき
雪乃ふりけるをよめる
きのつらゆき
霞たちこのめもはるの雪ふれは花なき里も花そちりける
春のはしめによめる　藤原のことなほ
春やとき花やおそきとききわかむ鴬たにもなかすもあるかな

春のはしめのうた　みふのたゝみね
春きぬと人はいへとも鴬のなかぬかきりはあらしとそおもふ
寛平御時きさいの宮の歌合のうた　源まさすみ
谷風にとくる氷のひまことにうちいつる波や春のはつ花
紀とものり
花のかを風のたよりにたくへてそ鴬さそふしるへにはやる
大江千里
鴬の谷よりいつるこゑなくは春くることをたれかしらまし
在原棟梁　業平朝臣男

はるたてと花も匂はぬ山里は物うかるねに鶯そなく

題しらす　　読人不知

野へちかく家ゐしせれは鶯の鳴なる声はあさなあさなきく

春日野はけふはなやきそ若草のつまもこもれり我もこもれり

かすかのゝとふひの野守いてゝみよ今いくかありて若菜つみてん

み山には松の雪たにきえなくに都は野への若なつみけり

梓弓をしてはるさめけふふりぬあすさへふらは若菜つみてん

仁和のみかとみこにおましましける時に人にわかな
たまひける御うた

君かため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ

哥たてまつれと仰られし時によみてたて
まつれる　　つらゆき

春日野のわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん

題しらす　　在原行平朝臣

春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみたるへらなれ

寛平御時きさいの宮の哥合によめる

源むねゆきの朝臣

ときはなる松のみとりも春くれは今ひとしほの色まさりけり

哥たてまつれと仰られし時によみてたて
まつれる　　貫之

我せこか衣はるさめふることに野への緑そ色まさりける

青柳乃糸よりかくる春しもそみたれて花のほころひにける

西大寺のほとりの柳をよめる

僧正遍昭

浅緑いとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

題しらす　よみ人しらす

もゝちとりさへつる春はものことにあらたまれとも我そふりゆく

遠近のたつきもしらぬ山中におほつかなくもよふこ鳥哉

かりのこゑをきゝてこしへまかりける人を思て

よめる

凡河内躬恒

春くれはかりかへるなり白雲のみちゆきふりにことやつてまし

帰雁をよめる　伊勢

春霞たつを見すてゝゆく雁は花なき里にすみやならへる

題しらす　よみ人しらす

折つれは袖こそにほへ梅の花ありとやこゝに鶯のなく

色よりも香こそあはれとおもほゆれたか袖ふれし宿の梅そも

宿ちかく梅の花うへしあちきなくまつ人の香にあやまたれけり

梅の花たちよるはかりありしより人のとかむるかにそしみぬる

むめの花ををりてよめる

東三条の左のおほいまうちきみ

鶯のかさにぬふてふ梅かえおりてかさゝむ老かくるやと

題しらす　素性法師

よそにのみあはれとそみし梅花あかぬ色かはおりてなりけり

梅の花をおりて人におくりける

とものり

君ならて誰にかみせむ梅花色をもかをもしる人そしる

くらふ山にてよめる

つらゆき

梅花にほふ春へはくらふ山やみにこゆれとしるくそありける

月夜に梅の花をおりてと人のいひけれは

おるとてよめる　みつね

月夜にはそれともみえす梅花かをたつねてそしるへかりける

春の夜梅の花をよめる

春の夜のやみはあやなし梅花色こそみえねかやはかくるゝ

はつせにまうつることにやとりける人の家に

ひさしくやとらて程へて後にいたれりけれは

かの家のあるしかくさたかになんやとりは

あるといひ出して侍けれはそこにたてりける

梅花をおりてよめる

つらゆき

人はいさ心もしらすふる里は花そ昔のかにゝほひける

水のほとりに梅の花さけりけるをよめる

伊勢

春ことになかるゝ川を花とみておられぬ水に袖やぬれなむ

年をへて花のかゝみとなる水はちりかゝるをやくもるといふらむ

家に有ける梅の花のちりけるをよめる

つらゆき

くるとあくとめかれぬ物を梅花いつの人まにうつろひぬらむ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

梅かゝを袖にうつしてとゝめては春はすくともかたみならまし

素性法師

ちるとみてあるへき物を梅花うたてにほひの袖にとまれる

題しらす　よみ人しらす

ちりぬともかをたにのこせ梅花こひしき時のおもひ出にせむ

人の家にうへたりける桜の花さきはしめたりける

をみてよめる

つらゆき

ことしより春しりそむる桜花ちるといふ事はならはさらなむ

題しらす　よみ人しらす

山たかみ人もすさめぬ桜花いたくなわひそ我みはやさん

又はさとゝほみ人もすさめぬ山さくら

山桜わかみにくれは春霞峯にも尾にもたちかくしつゝ

そめとのゝきさきのおまへに花かめに桜の花を

さゝせ給へるをみてよめる

さきのおほきおほいまうちきみ

年ふれはよはひはおいぬしかはあれと花をしみれは物思ひもなし

なきさの院にてさくらをみてよめる

在原業平朝臣

世中にたえて桜のなかりせは春の心はのとけからまし

題しらす

よみ人しらす

いしはしるたきなくもかな桜花折てもこんみぬ人の為

山のさくらをみてよめる

そせい法師

みてのみや人にかたらん桜花てことにおりて家つとにせん

花さかりに京をみやりてよめる

みわたせは柳桜をこきませて都そ春の錦なりける

桜乃花のもとにて年のおいぬるをなけきて

よめる

紀友則

色も香もおなし昔にさくらめと年ふる人そあらたまりける

をれるさくらをよめる

つらゆき

たれしかもとめてをりつる春霞たちかくすらん山の桜を

哥たてまつれとおほせられし時によみてたてまつれる

桜花さきにけらしなあしひきの山のかひよりみゆるしら雲

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

とものり

みよしのゝ山へにさける桜花雪かとのみそあやまたれける

やよひにうるふ月のありける年よみける

伊勢

桜花春くはゝれる年たにも人の心にあかれやはせぬ

さくらの花のさかりにひさしくとはさりける人のきたりける時によみける

よみ人しらす

あたなりと名にこそたてれ桜花年にまれなる人もまちけり

返し

なりひらの朝臣

けふこすはあすは雪とそふりなましきえすはありとも花とみましや

題しらす

よみ人しらす

ちりぬれはこふれとしるしなき物をけふこそ桜おらはおりてめ

をりとらはをしけにもあるか桜花いさやとかりてちるまては見ん

きのありとも

桜色に衣はふかくそめてきむ花のちりなむ後のかたみに

さくらの花のさけりけるを見にまうてきたりける人によみてをくりける

みつね

我宿の花みかてらにくる人はちりなむ後そこひしかるへき

亭子院歌合の時よめる

伊勢

みる人もなき山里の桜花ほかのちりなむ
のちそさかまし

古今和歌集巻第二

春歌下

題しらす

よみ人しらす

春霞たなひく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆく

まてといふにちらてしとまる物ならはなにを桜に思ひまさまし

残りなくちるそめてたき桜花ありて世中はてのうけれは

この里にたひねしぬへし桜花ちりのまかひに家路わすれて

うつせみの世にもにたるか花桜さくとみしまにかつちりにけり

僧正遍昭によみてをくりける

これたかのみこ

桜花ちらはちらなんちらすとてふるさと人のきてもみなくに

雲林院にてさくらの花のちりけるをみて
よめる　そうく法師（承均）

桜ちる花の所ははるなからゆきそふりつゝきえかてにする

桜の花のちり侍りけるをみてよみける
そせい法師

花ちらす風のやとりはたれかしる我にをしへよゆきてうらみん

うりんゐんにてさくらの花をよめる
そうく法師

いさ桜我もちりなんひとさかりありなは人にうきめみえなん

あひしれりける人のまうてきてかへりに
けるのちによみて花にさしてつかはしける
つらゆき

ひとめみし君もやくるとさくら花けふはまちみてちらはちらなん

山のさくらをみてよめる

春霞なにかくすらん桜花ちるまをたにもみるへきものを

心ちそこなひてわつらひける時に風にあたらし
とておろしこめてのみ侍りけるあひたに
をれる桜のちりかたになれりけるをみて
よめる　藤原よるかの朝臣

て春のゆくゑもしらぬまにまちし桜もうつろひにけり

東宮雅院にて桜の花のみかは水にちりて

なかれけるをみてよめる

すかのゝたかよ

枝よりもあたにちりにし花なれはおちても水のあはとこそなれ

桜乃花のちりけるをよめる

貫之

ことならはさかすやはあらぬ桜花みる我さへにしつ心なし

桜のことくとくちる物はなしと人のいひけれはよめる

桜花とく散ぬともおもほえす人の心そ風も吹あへぬ

さくら乃花のちるをよめる

きのとものり

久かたのひかりのとけき春の日にしつ心なく花のちるらん

春宮のたちはきの陣にて桜の花のちるをよ

める

藤原のよしかせ

春風は花のあたりをよきてふけ心つからやうつろふとみん

さくら乃ちるをよめる

凡河内みつね

雪とのみふるたにあるを桜花いかにちれとか風の吹らん

ひえにのほりてかへりまうてきてよめる

つらゆき

山たかみ見つゝわかこし桜花風は心にまかすへらなり

題しらす　　大伴くろぬし

春雨のふるは涙か桜花ちるをゝしまぬ人しなけれは

亭子院哥合のうた　　つらゆき

桜花ちりぬる風のなこりには水なき空に浪そたちける

ならのみかとの御うた

ふる里となりにしならの都にも色はかはらす花はさきけり

春のうたとてよめる　　よしみねのむねさた

花の色はかすみにこめてみせすとも香をたにぬすめ春の山かせ

寛平の御時きさいの宮の哥合のうた　　素性法師

花の木も今はほりうへし春たてはうつろふ色に人ならひけり

題しらす　　よみ人しらす

春の色のいたりいたらぬ里はあらしさけるさかさる花のみゆらん

春のうたとてよめる　　つらゆき

みわ山をしかもかくすか春霞人にしられぬ花やさくらん

うりん院のみこのもとに花見にきた山のほ
とりにまかれりける時によめる
そせい
いさけふは春の山へにましりなむくれなはなけの花のかけかは
いつまてか野へに心のあくかれむ花しちらすは千世もへぬへし
題しらす
よみ人しらす
春ことに花のさかりはありなめとあひ見む事はいのちなりけり
花のことよのつねならはすくしてし昔は又もかへりきなまし
吹風にあつらへつくる物ならはこの一もとはよきよといはまし
まつ人もこぬものゆへに鶯のなきつる花をおりてけるかな
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
藤原おきかせ
さく花は千くさなからにあたなれとたれかは春をうらみはてたる
春霞色のちくさに見えつるはたなひく山の花のかけかも
在原元方
霞たつ春の山へはとをけれとふきくる風は花の香そする
うつろへる花を見てよめる
みつね
花見れは心さへにそうつりける色には出し人もこそしれ

題しらす　よみ人しらす

鶯乃なく野辺ことにきてみれはうつろふ花に風そ吹ける

吹風をなきてうらみよ鶯は我やは花にてたにふれたる

典侍洽子朝臣

ちる花乃なくにしとまる物ならは我鶯におとらましやは

仁和乃中将のみやす所の家に哥合せんとてしける時によみける

藤原後蔭

花のちることやわひしき春霞たつたの山の鶯のこゑ

うくひすのなくをよめる

そせい

こつたへはをのかは風にちる花を誰におほせてここらなくらん

鶯乃花の木にてなくをよめる

みつね

しるしなきねをもなくかな鶯のことしのみちる花ならなくに

題しらす

読人不知

こまなめていさみにゆかんふるさとは雪とのみこそ花はちるらめ

ちる花をなにかうらみん世中に我身もともにあらん物かは

小野小町

花の色はうつりにけりないたつらに我身世にふるなかめせしまに

仁和の中将のみやす所の家に歌合せんと
しける時によみける
そせい
おしと思ふ心はいとによられなむちる花ことにぬきてとゝめむ
志賀の山こえに女のおほくあへりけるによみて
つかはしける
つらゆき
梓弓はるの山へをこえくれは道もさりあへす花そちり
ける
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
春の野に若なつまむとこしものをちりかふ花に道はまとひぬ

山寺にまうてたりけるによめる
やとりして春の山へにねたる夜は夢の内にも花そちりける
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
吹風と谷の水としなかりせはみ山かくれの花をみましや
志賀よりかへりける女ともの花山に入りて藤の花のもとにたちよりてかへり
けるによみておくりける
僧正遍昭
よそにみてかへらむ人に藤の花はひまつはれよ枝はおるとも
家に藤の花のさけりけるを人のたちとま

りてみけるをよめる　みつね

我宿にさける藤浪たちかへりすきかてにのみ人の見るらん

題しらす　よみ人しらす

いまもかもさき匂ふらん橘のこしまのさきの山吹の花

春雨に匂へる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花

山吹はあやなゝさきそ花見んとうへけん君かこよひこなくに

よしの河のほとりにやまふきのさけりけるをよめる　つらゆき

よしの河岸の山吹ふく風にそこの影さへうつろひにけり

題しらす　読人不知

かはつなく井手の山吹散にけり花のさかりにあはましものを

このうたはある人のいはくたちはなのきよともかうたなりとや

春の哥とてよめる　そせい

思ふとち春の山辺にうちむれてそこともいはぬ旅寝してしか

はるのとくすくるをよめる　みつね

あつさゆみ春たちしより年月のいるかことくもおもほゆるかな

やよひに鶯のこゑの久しうきこえさりけるをよめる

つらゆき

鳴とむる花しなけれは鶯もはてはものうく成ぬへらなり

やよひのつこもりかたに山をこえけるに山川より花のなかれけるをよめる

ふかやふ

花ちれる水のまにまにとめくれは山には春もなくなりにけり

はるをおしみてよめる

もとかた

おしめともとゝまらなくに春霞かへる道にしたちぬとおもへは

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

おきかせ

こゑたえすなけや鶯ひとゝせにふたゝひとたにくへき春かは

やよひのつこもりの日花つみよりかへりける女ともを見てよめる

みつね

とゝむへき物とはなしにはかなくもちる花ことにたくふ心か

やよひのつこもりの日雨のふりけるにふちの花をおりて人につかはしける

ありはらのなりひらの朝臣

ぬれつゝそしゐておりつる年の内に春はいくかもあらしとおもへは

亭子院の歌合に春のはてのうた

みつね

けふのみと春をおもはぬ時たにも

たつことやすき花のかけかは

古今和歌集巻第三

夏歌

題しらす　よみ人しらす

我宿の池の藤なみさきにけり山時鳥いつかきなかむ

この歌ある人のいはく柿本人丸かなり

卯月にさけるさくらを見てよめる　紀としさた

あはれてふことをあまたにやらしとや春におくれてひとりさくらむ

題しらす　よみ人しらす

さ月まつ山時鳥うちはふきいまもなかなむこそのふる声

伊勢

五月こはなきもふりなむ郭公まだしき程の声をきかはや

よみ人しらず

さ月まつ花たちはなのかをかけは昔の人の袖のかぞする

いつのまにさ月きぬらん足引の山郭公いまぞ鳴なる

けさきなけいまだ旅なる郭公花たちはなにやどはからなん

をとは山をこえける時に郭公の鳴をききて

とものり

音羽山けさこえくれは郭公梢はるかにいまぞなくなる

郭公のはじめて鳴けるをききて

そせい

郭公はつこゑきけはあぢきなくぬしさだまらぬ恋せらるはた

ならのいそのかみでらにて郭公の鳴をよめる

いそのかみふるき都の郭公声はかりこそむかしなりけれ

題しらず

よみ人しらず

夏山になく郭公心あらは物思ふ我に声なきかせそ

郭公なく声きけはわかれにしふるさとさへぞこひしかりける

郭公なかなく里のあまたあれはなをうとまれぬ思ふものから

思ひいづるときはの山の郭公からくれなゐのふりいでてぞなく

こゑはして涙はみえぬ郭公わが衣手のひつをからなむ

足曳の山郭公をりはへて誰かまさるとねをのみそなく

今更に山へかへるな郭公声のかきりは我宿になけ

みくにのまち

やよやまて山ほとゝきすことつてむ我世中にすみわひぬとよ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

きのとものり

さみたれに物思ひをれはほとゝきす夜ふかく鳴ていつちゆくらん

夜やくらき道やまとへるほとゝきす我宿をしもすきかてになく

大江千里

やとりせし花橘もかれなくになとほとゝきす声たえぬらん

きのつらゆき

夏の夜のふすかとすれはほとゝきすなく一声にあくるしのゝめ

みふのたゝみね

くるゝかとみれはあけぬる夏の夜をあかすとやなく山ほとゝきす

紀秋岑

夏山に恋しき人やいりにけん声ふりたてゝなくほとゝきす

題しらす

よみ人しらす

こそのなつ鳴ふるしてし郭公それかあらぬか声のかはらぬ

ほとゝきすのなくをきゝてよめる

つらゆき

五月雨の空もとゞろに時鳥なにをうしとかよたゞなくらん

さふらひにてをのこどものさけたうへけるに
めして時鳥まつ歌よめとありけれはよめる

みつね

郭公声もきこえす山ひこはほかに鳴ねをこたへやはせぬ

山に時鳥のなきけるをきゝてよめる

つらゆき

時鳥人まつ山になくなれは我うちつけにこひまさりけり

はやくすみける所にて郭公のなきけるを
きゝてよめる

たゞみね

むかしへや今もこひしき時鳥ふるさとにしも鳴てきつらん

郭公のなきけるをきゝてよめる

みつね

時鳥我とはなしに卯の花のうき世中になきわたるらん

はちすのつゆをみてよめる

僧正遍昭

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

月のおもしろかりける夜あかつきがたによめる

ふかやぶ

夏の夜はまだよひながらあけぬるを雲のいづこに月やどるらん

となりよりとこ夏の花をこひにおこせたりけれは
をしみてこのうたをよみてつかはしける
みつね
ちりをたにすへしとそ思ふさきしよりいもとわかぬるとこ夏の
みな月のつこもりの日よめる
夏と秋とゆきかふそらのかよひちはかたへすゝしき風やふくらん

古今和歌集巻第四

秋歌上

秋立日よめる　藤原敏行朝臣
秋きぬとめにはさやかにみえねとも風の音にそおとろかれぬる
秋立日うへのをのこともかものかはらにかはせうえうしけるともにまかりてよめる
つらゆき
河風のすゝしくもあるかうちよする浪とゝもにや秋は立らん
題しらす　讀人不知
わかせこか衣のすそを吹かへしうらめつらしき秋の初風

きのふこそさなへとりしかいつのまにいなはそよきて秋風のふく
秋風の吹にし日より久かたのあまのかはらにたゝぬ日はなし
久かたのあまのかはらのわたしもりきみわたりなはかちかくしてよ
天河もみちをはしにわたせはやたなはたつめの秋をしもまつ
恋しくてあふよはこよひ天川きりたちわたりあけすもあらなん
寛平御時なぬかのよ殿上にさふらふをのこと
も哥たてまつれと仰られける時人に
かはりてよめる　とものり
天河あさせしら浪たとりつゝわたりはてねはあけそしにける
おなし御時きさいの宮の哥合のうた
藤原おきかせ
契りけん心そつらき七夕の年にひとたひあふはあふかは
なぬかの日のよゝめる　凡河内みつね
年ことにあふとはすれと七夕のぬるよのかすそすくなかりける
たなはたにかしつる糸のうちはへて年のをなかく恋やわたらん
題しらす　そせい
こよひこん人にはあはし七夕のひさしき程にまちもこそすれ
なぬかの夜のあかつきによめる
源むねゆきの朝臣

今はとてわかるゝ時は天河わたらぬさきに袖そひちぬる

八日の日よめる　みふのたゝみね

けふよりはいまこん年のきのふをそいつしかとのみまちわたるへき

題しらす　よみ人しらす

このまよりもりくる月のかけみれは心つくしの秋はきにけり

大かたの秋くるからに我身こそかなしき物と思ひしりぬれ

わかためにくる秋にしもあらなくに虫のねきけはまつそかなしき

ものことに秋そかなしきもみちつゝうつろひゆくをかきりと思へは

ひとりぬる床は草葉にあらねとも秋くるよひはつゆけかりけり

これさたのみこの家の歌合のうた

いつはとは時はわかねと秋のよそ物おもふことのかきりなりける

かみなりのつほに人〻あつまりて秋のよおしむ

うたよみけるついてによめる

みつね

かくはかりおしと思ふ夜をいたつらにねてあかすらん人さへそうき

題しらす　よみ人しらす

白雲にはねうちかはしとふかりのかすさへみゆる秋のよの月

さよなかとよはふけぬらしかりかねのきこゆるそらに月わたるみゆ

これさたのみこの家の歌合によめる

大江千里

月見れはちゝにものこそ悲しけれ我身ひとつの旅にはあらねと

こゝみ称

冬の夜の月のかけこそ旅にはわひしもみちすれはやすかまさる

月をよめる　在原元方

旅の夜の月の光しあかゝれはくらふの山もこえつるや

人のもとにはゝわたしけるたきちくすの

かきけひきてよめる

藤原ことねき

春体しはなきさ旅の夜の寝覚の思ひは我そ悲しき

見貞のみこの家乃哥合のうた

こゝまとの調

旅乃夜のあはれをきゝて鳴虫は我しめや悲しかるへし

題しらす　よみ人しらす

旅ちかき人もなく思ひは若草の嶺をしやまれ路よ

旅の夜に宿そこにしも思ひし草枕にも虫の音そ飛

秋の夜の草にやからまつ虫のなくは悲かり

旅の夜の道しらしと思ふ松虫のなくなる石やまの庭

あきの夜の人しらぬ虫のね聞なから我しのひて泣旅路

もみちの数にけふ我宿に淀に松虫の声すなり

むしの鳴けるを聞日くらしの山のもみちそ鳴

日くらしのなく山里の夕暮は風よりほかにとふ人もなし
ものおもふ人よみける

在原元方

待人にあらぬ物から初雁のけさなく声のめつらしき哉

是貞のみこの家の哥合のうた

とものり

秋風に初雁かねそきこゆなる誰玉章をかけてきつらん

題しらす　よみ人しらす

我門にいなおほせ鳥の鳴なへにけさ吹風に雁はきにけり

いとはやもなきぬるかりか白露の色とる木々ももみちあへなくに

春霞かすみていにしかりかねは今そ鳴なる秋霧のうへに

夜をさむみ衣かりかね鳴なへに萩の下葉もうつろひにけり

此哥はある人のいはく柿本人丸か也と

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

藤原菅根朝臣

秋風にこゑをほにあけてくる舟はあまのとわたるかりにそ有ける

かりのなきけるをきゝてよめる

みつね

うきことを思つらねてかりかねのなきこそわたれ秋のよなよな

是貞のみこの家の哥合のうた

たゝみね

山里ハ秋こそことにわひしけれ鹿のなくねにめをさましつゝ

読人不知

おく山に紅葉ふみわけ鳴鹿の声きく時そ秋ハかなしき

題しらす

秋萩にうらひれをれハあしひきの山したとよみ鹿のなくらん

秋萩をしからみふせて鳴鹿のめにハみえすて音のさやけさ

これさたのみこの家乃哥合によめる

藤原としゆきの朝臣

秋萩の花さきにけり高砂のをのへの鹿ハ今やなくらん

むかしあひしりて侍ける人の秋の野にて

あひて物かたりしけるついてによめる

みつね

秋萩のふるえにさける花見れハもとの心ハわすれさりけり

題しらす

よみ人しらす

あき萩の下葉色つく今よりや独ある人のいねかてにする

鳴わたる雁の涙やおちつらん物思ふ宿の萩のうへの露

萩の露玉にぬかんととれハけぬよしみん人ハ枝なからみよ

ある人のいはく此哥ハならのみかとの御哥なりと

をりてみハおちそしぬへき秋萩の枝もたわゝにをけるしら露

萩か花ちるらんをのゝ露霜にぬれてをゆかんさよはふくとも

是貞のみこの家の哥合によめる

文屋あさやす

秋の野におく白露は玉なれやつらぬきかくるくものいとすぢ

題しらず

僧正遍昭

名にめでてをれるばかりぞ女郎花我おちにきと人にかたるな

僧正遍昭かもとにならへまかりける時におとこ山にて女郎花を見てよめる

布留今道

女郎花うしとみつゝぞゆきすぐるおとこ山にしたてりと思へば

是貞のみこの家の哥合のうた

としゆきの朝臣

秋の野にやどりはすべし女郎花名をむつまじみ旅ならなくに

題しらず

をのゝよし木

女郎花おほかる野辺にやどりせばあやなくあだの名をや立覧

朱雀院の女郎花合によみてたてまつりける

左のおほいまうち君

女郎花秋の野風にうちなびき心ひとつをたれによすらん

藤原定方朝臣

秋ならてあふことかたき女郎花あまのかはらにおひぬ物ゆへ

つらゆき

たか秋にあらぬものゆへ女郎花なそ色に出てまたきうつろふ

みつね

妻こふる鹿そ鳴なるをみなへしをのかすむのゝ花としらすや

女郎花吹すきてくる秋風はめには見えねと香こそしるけれ

たゝみね

人のみることやくるしき女郎花秋きりにのみ立かくるらん

ひとりのみなかむるよりは女郎花我すむ宿にうへてみましを

ものへまかりけるに人の家に女郎花うへたり
けるをみてよめる

兼覧王

女郎花うしろめたくもみゆるかなあれたる宿にひとりたてれは

寛平御時蔵人所のをのこともさかのに花
みむとてまかりたりける時かへるとてみな
うたよみけるついてによめる

平さたふん

花にあかて何かへるらん女郎花おほかる野へにねなまし物を

これさたのみこの家の哥合によめる

としゆきの朝臣

なに人かきてぬきかけしふちはかまくる秋ことに野へをにほはす

ふちはかまをよみて人につかはしける

つらゆき

やとりせし人のかたみか藤はかまわすられかたき香ににほひつゝ

ふちはかまをよめる

そせい

ぬししらぬ香こそにほへれ秋のゝにたかぬきかけし藤はかまそも

題しらす

平貞文

今よりはうへてたにみし花すゝきほにいつる秋はわひしかりけり

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ありはらのむねやな

秋の野の草のたもとか花すゝきほにいてゝまねく袖とみゆらむ

素性法師

我のみや哀と思はむきりきりすなく夕かけのやまとなてしこ

題しらす

よみ人しらす

みとりなるひとつ草とそ春はみし秋はいろいろの花にそありける

もゝ草の花のひもとく秋の野に思ひたはれむ人なとかめそ

月草に衣はすらむあさつゆにぬれてのゝちはうつろひぬとも

仁和のみかとみこにおはしましける時ふるのたき

御らんせむとておはしましける道に

遍昭かはゝの家にやとりたまへりける時に

庭を梅のゆかりにつくりておほむ物かたりのつい
てによみてたてまつりける

僧正遍昭

里はあれて人はふりにしやとなれや
庭も籬も梅の花なる

古今和歌集巻第五

梅歌下

是貞のみこの家の歌合のうた

文屋やすひて

吹からに梅の草木のしをるれはむへ山風をあらしといふらん
草も木も色はかはれともわたつ海の波の花にそ梅なかりける

梅の歌合しける時によめる

紀よしもち

もみちせぬときはの山は吹風の音にや梅をききわたるらむ

題しらす

よみ人しらす

霧立てかりそ鳴なる片岡の朝の原はもみちしぬらん
神な月しくれもいまたふらなくにかねてうつろふ神なひのもり
ちはやふる神なひ山のもみちはに思ひはかけしうつろふものを
貞観の御時綾綺殿のまへにむめの木ありけり
にしのかたにさせりける枝のもみちはしめたりけるを
うへにさふらふをのこともの
よみけるついてによめる
藤原かちおむ
おなしえをわきて木のはのうつろふは西こそ秋の初なりけれ
いしやまにまうてけるときおとは山のもみちをみて
よめる　つらゆき
秋風の吹にし日よりおとは山みねのこすゑも色付にけり
これさたのみこの家の歌合によめる
としゆきの朝臣
白露の色はひとつをいかにして秋の木のはをちゝにそむらん
壬生忠岑
秋の夜の露をはつゆとおきなから雁のなみたや野へをそむらん
題しらす
読人しらす
秋の露いろいろことにおけはこそ山のこのはのちくさなるらめ

はしたき

白雲も雨夜もいてくかゝる山ハ下紫のこ夜ルゝ女升ゝけり

嫁乃ゝるさてよみ侍る

われりしれもしるく

雨乃秋こ雲もちゝしをわさこるの山いつてりとみちぬらん

神のやしろのわさきを夜あけゝ雨はい哉の

うち乃しきみちをみてよめる

はしたき

ちいや雨乃秋乃いは花のちふくすも嫁ちいあへすらいろ乃はし

毛貞乃みこの家ル宮舎よよめる

くみ林

雨ねはかさゝも山乃み葉ハ紅乃ふ人の袖さへうつゐる

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

ちる林こともみてもおしき山葉は今ハ限の色こみつれも

やまし乃くゐ夜のわけゝきさらかみり

きのこしそけるをみてよめる

きのこものり

毛の為ル錦あ秋ハの嫁房のさかの山へをちゝのくらん

毛貞ルみこの家ル歌合のうた

よみ人しらす

旅寝にはさむさそまさる山風のそのゆふくれはわかれをしきに
あかつきはまさりてよるなる

坂上これのり

さほ山のははそのもみちはたれぬれはたひのとまりにけるかな
人のあきさむきにかきすはいけるくらけり

在原元方

うくひすの旅なる花はやちりぬらんむしちりちるはなふくかせや
寛平御時きさいの宮のうたあはせにみえける

としゆきの朝臣

久かたの月のかつらもあきはなほもみちすれはやてりまさるらむ
この葉はまつほとにちりけれはなかめし
あきにみてけりのちけるさかえ

おほかたのみかのあきの宮のうた

きのとものり

ゆきのふりてかくれたるはなのおいてもかはしのをきまよふ
寛平御時きさいの宮のうた

大江千里

うくひすのなかむまちはるのけいりくひにはなのうつるや
あきの御ふかくみけるはなのをすかはるつ

つくりて菊の花うへたりけるにくはへたりける
ふきあけのはまのかたにきくうへたりけるに
よめる
すかはらの朝臣

秋風乃吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか

仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる

素性法師

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我はへにけん

菊の花のもとにて人の人まてるかたをよめる

とものり

花みつゝ人まつ時は白妙の袖かとのみそあやまたれける

おほさはの池のかたに菊うへたるをよめる

ひともとゝ思ひし花をおほさはの池のそこにも誰かうへけん

世中のはかなき事を思ひけるをりに菊の花をみてよめる

つらゆき

秋乃菊匂ふかきりはかさしてん花よりさきとしらぬわか身を

白菊の花をよめる

凡河内みつね

心あてにをらはやをらん初霜のおきまとはせる白菊の花

これさたのみこ乃家乃哥合のうた

よみ人しらす

色かはる秋の菊をはひとゝせにふたゝひにほふ花とこそみれ

仁和寺に菊の花めしける時に哥そへてたてまつれとおほせられけれはよみてたてまつりける

平定文

秋をおきて時こそ有けれ菊の花うつろふからに色のまされは

人の家なりける菊の花をうつしうへたりけるによめる

さきそめし宿しかはれは菊の花色さへにこそうつろひにけれ 貫之

題しらす

よみ人しらす

さほ山のはゝそのもみち散ぬへみよるさへみよとてらす月影

宮つかへひさしうつかうまつらてやま里にこもり侍けるによめる

藤原関雄

おく山のいはかきもみち散ぬへしてる日の光みる時なくて

題しらす

よみ人しらす

竜田河もみちみたれてなかるめりわたらは錦中やたえなむ

此哥はある人ならのみかとの御哥也となむ申す

龍田川もみちはなかる神なひのみむろの山にしくれふるらし

又はあすかの川もみち葉なかる 此哥右人丸の哥

恋しくはみてもしのはむもみち葉を吹なちらしそ山おろしの風

秋風にあへすちりぬる紅葉のゆくへさためぬ我そかなしき
秋ハきぬ紅葉ハやとにふりしきぬ道ふみわけてとふ人ハなし
ふみわけてさらにやとはむもみち葉のふりかくしてし道とみなから
秋の月山へさやかにてらせるハおつる紅葉の数をみよとか
吹風の色のちくさにみえつるハ秋の木の葉のちれハなりけり

せきを

霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦のおれハかつちる

うりんゐんの木のかけにたゝすみてよみける

僧正遍昭

わひ人のわきて立よるこのもとハたのむかけなく紅葉散けり

二条の后のとう宮のみやすん所と申けるときに
御屏風に竜田川に紅葉なかれたるかたを
かけりけるを題にてよめる

そせい

紅葉のなかれてとまるみなとにハ紅ふかき浪やたつらん

なりひらの朝臣

ちハやふる神代もきかす竜田川からくれなゐに水くゝるとハ

これさたのみこの家の歌合のうた

としゆきの朝臣

我きつるかたもしられすくらふ山木々のこの葉の散とまかふに

もみち

神なひのみむろの山を秋ゆけは錦たちきる心ちこそすれ

きた山にもみちをらんとてまかれりける時に

よめる　つらゆき

みる人もなくて散ぬる奥山のもみちは夜の錦成けり

秋乃うた　かねみの王

立田姫たむくる神のあれはこそ秋の木のはのぬさとちるらめ

をのといふ所にすみ侍ける時もみちをみて

よめる　つらゆき

秋の山紅葉をぬさとたむくれはすむ我さへそ旅心ちする

神なひの山をすきて立田河をわたりける時にもみちのなかれけるをよめる

清原深養父

神なひの山をすきゆく秋なれは立田川にそぬさはたむくる

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原おきかせ

白浪に秋の木のはのうかへるをあまのなかせる舟かとそみる

立田河のほとりにてよめる

坂上是則

もみち葉のなかれさりせは立田河水の秋をはたれかしらまし

志賀乃山こしにてよめる

はるみちのつらき

山河に風乃かけたるしからみハなかれもあへぬもみちなりけり

池のほとりにてもみちのちるをよめる

みつね

風吹ハおつる紅葉も水きよミちらぬかけさへ底にみえつゝ

亭子院の御屏風の絵に川わたらんとする

人のもみち乃ちる木のもとにむまをひかへて

たてるをよませ給ひけれハつかうまつ

りける

たちとまりみてをわたらん紅葉ハ雨とふるとも水ハまさらし

これさたのみこの家の哥合のうた

たゝみね

山田もる秋乃かりいほにおく露ハいなおほせ鳥の涙成へし

題しらす

よみ人しらす

ほにも出ぬ山田をもると藤衣いなはの露にぬれぬ日そなき

かれる田におふるひつちのほに出ぬハ世を今更に秋はてぬとか

北山に僧正遍昭とたけかりにまかれりける

によめる

そせい法し

紅葉ハ袖にこきいれてもて出なん秋ハかきりとみん人のため

寛平の御時ふるき歌たてまつれとおほせら
れけれは竜田川もみちはなかるといふ歌をか
きてそのおなしこゝろをよめりける

おきかせ

み山よりおちくる水の色みてそ秋は限と思しりぬる

秋のはつる心を竜田川に思やりてよめる

つらゆき

年ことにもみち葉なかす竜田川みなとや秋のとまりなるらん

長月のつこもりの日大井にてよめる

夕月夜をくらの山に鳴鹿の声のうちにや秋はくるらん

おなしつこもりの日よめる

みつね

道しらはたつねもゆかんもみち葉をぬさとたむけて秋はいぬらし

古今和歌集巻第六

冬歌

題しらず　　よみ人しらず

龍田河錦おりかく神な月しくれの雨をたてぬきにして

冬の歌とてよめる　　源宗于朝臣

山里は冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬと思へは

題しらず　　よみ人しらず

おほそらの月のひかりしきよけれは影見し水そまつこほりける

夕されは衣手さむしみよしのの吉野の山にみ雪ふるらし

今よりはつきてふらなん我宿のすゝきおしなみふれる白雪

ふる雪はかつそけぬらしあしひきの山のたきつせ音まさるなり

この河にもみち葉なかる奥山の雪けの水そ今まさるらし

故里は吉野の山しちかけれは一日もみ雪ふらぬ日はなし

わか宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなけれは

冬のうたとてよめる　　紀貫之

雪ふれは冬こもりせる草も木も春にしられぬ花そさきける

志賀の山こえにてよめる　　紀秋岑

白雪の所もわかず降しけば巌にもさく花とこそみれ

ならの京にまかれりける時にやどれりける所
にてよめる　坂上是則

みよしのの山の白雪つもるらしふるさとさむく成まさる也

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ふぢはらのおきかぜ

浦ちかくふりくる雪は白浪の末の松山こすかとぞみる

壬生忠岑

みよしのの山の白雪ふみわけていりにし人のおとづれもせぬ

白雪の降てつもれる山里はすむ人さへや思ひきゆらん

雪のふりけるをみてよめる

凡河内みつね

雪降て人もかよはぬ道なれや跡はかもなく思ひきゆらん

ゆきのふりけるをよみける

きよはらのふかやぶ

冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらん

雪の木にふりかゝれりけるをよめる

つらゆき

冬ごもり思ひかけぬをこのまより花とみるまで雪ぞ降ける

やまとのくにゝまかれりける時に雪の降

けふはみゆきふりける

坂上是則のうた

朝ぼらけ有明の月とみるまでによしのの里にふれる白雪

題しらず　よみ人しらず

けぬがうへに又もふりしけ春霞たちなばみ雪まれにこそみめ

梅の花それともみえず久方のあまぎる雪のなべてふれゝば

この歌はある人のいはく柿のもとの人丸の歌也

梅の花に雪のふれるをよめる

小野たかむらの朝臣

花の色は雪にまじりてみえずとも香をだににほへ人のしるべく

雪のうちの梅の花をよめる

きのつらゆき

梅の香のふりおける雪にうつりせばたれかことごとわきてをらまし

雪のふりけるをみてよめる

紀とものり

雪ふれば木ごとに花ぞ咲きにけるいづれを梅とわきてをらまし

物へまかりける人をまちてしはすのつごもりによめる

みつね

わがまたぬ年はきぬれど冬草のかれにし人はおとづれもせず

としのはてによみ侍る

在原もとかた

あらたま乃年のをはりになる毎に雪もわか身もふりまさりつゝ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

よみ人しらす

雪ふりて年乃くれぬる時にこそつゐにもみちぬ松もみえけれ

としのはてによみ侍る

はるみちのつらき

きのふといひけふとくらしてあすか河なかれてはやき月日なりけり

哥たてまつれと仰られし時よみてたてまつれる

紀のつらゆき

ゆく年のをしくもあるかなます鏡

みるかけさへにくれぬと思し

おもへは

古今和歌集巻第七

賀哥

題しらず　　読人不知

我君は千世にやちよにさゞれ石のいはほと成て苔のむすまで

わたつ海の濱のまさごをかぞへつゝ君がちとせの有数にせむ

しほの山さしでの磯にすむ千鳥君が御代をばやちよとぞなく

わが齢君がやちよにとりそへてとゞめをきてはおもひ出にせよ

仁和の御時僧正遍昭に七十の賀たまひける時の御哥

かくしつゝとにもかくにもながらへて君がやちよにあふよしもがな

仁和のみかどみこにおはしましける時に御をばの八十の賀にしろがねを杖につくれりけるをみてかのをばにかはりてよみける

僧正遍昭

ちはやぶる神やきりけむつくからに千とせの坂もこえぬべらなり

堀河のおほいまうち君の四十賀九条の家にてしける時によめる

在原業平朝臣

桜花ちりかひくもれおいらくのこむといふなる道まがふがに

さだときのみこのをばのよそぢの賀を大井

おほゐにてしける日よめる

紀のこれをか

かめのおの山のいはねをとめておつる滝の白玉千世のかずかも

さだやすのみこのきさいの宮の五十の賀
たてまつりける御屏風にさくらの花の
ちるしたに人の花みたるかたかけるをよめる

藤原のおきかぜ

いたづらにすぐる月日はおもほえで花見てくらす春ぞすくなき

もとやすのみこの七十の賀のうしろの屏風
によみてかきける

きのつらゆき

春くれば宿にまづさく梅の花君がちとせのかざしとぞみる

素性法師

いにしへにありきあらずはしらねども千とせのためし君にはじめむ

ふしておもひおきてかぞふるよろづ世は神ぞしるらむ我君のため

藤原三善が六十賀によみける

在原しげはる

つるかめも千年ののちはしらなくにあかぬ心にまかせはててむ

此哥はある人在原のときはるがともいふ

よしみねのつねなりがよそぢの賀にむす

めにかはりてよみ侍ける

そせい法し

万代をまつにぞきみをいはひつるちとせのかげにすまむと思へば

内侍のかみの右大将藤原朝臣の四十賀し

ける時に四季の絵かけるうしろの屛風にかき

たりけるうた

春日野にわかなつみつゝ万代をいはふ心は神そしるらん

山たかみくもゐにみゆる桜花心のゆきておらぬ日そなき

夏

めつらしき声ならなくに郭公こゝらの年をあかすもあるかな

秋

住の江の松を秋風吹からに声うちそふるおきつしら浪

千鳥なくさほの河霧たちぬらし山の木の葉も色まさりゆく

秋くれと色もかはらぬときは山よそのもみちを風そかしける

冬

白雪のふりしく時はみよしのゝ山下風に花そちりける

春宮のむまれ給へりける時にまいりて

よめる　典侍藤原よるかの朝臣

峰たかきかすかの山にいつる日は

くもる時なくてらすへらなり

古今和歌集巻第八

離別哥

題しらず　在原行平朝臣

立わかれいなばの山の峯におふるまつとしきかば今かへりこむ

よみ人しらず

すがるなく秋のはぎはら朝たちて旅行人をいつとかまたむ

かぎりなき雲ゐのよそにわかるとも人を心におくらさむやは

をのゝちふるがみちのくのすけにまかりける時に母のよめる

たらちねのおやのまもりとあひそふる心ばかりはせきなとゞめそ

さだときのみこの家にて藤原のきよふがあふみのすけにまかりける時にむまのはなむけしける夜よめる

きのとしさだ

けふわかれあすはあふみと思へども夜やふけぬらむ袖の露けき

こしへまかりける人によみてつかはしける

かへる山ありとはきけど春霞立わかれなばこひしかるべし

人のむまのはなむけにてよめる

きのつらゆき

をしむからこひしき物を白雲の立なむ後はなにこゝちせむ

こともちの人みくらへ殿のわけのなとあり

去来しけり

わかれくいへりしを〳〵けに思ひやりと命のほとの殿を忘るゝさ

ありまにうれへまゐりけん人よみてける

しけり

いさこのわけ川花

思ひしもりにかゝるを我かみて思ひ夜の君かまくら〳〵あやうき

わふうれて人をわかれけゆ雨よみをる

たまくいのよるわけを

相坂乃関しゐさしきおきつゝあくらくるまのかよひを

題しらす　　讀人不知

うつ夜ふけはいきりし朝露のおきてしゆきけ思ひつゝおと

此亭いありし人けりきを待りつてあらし

きぬきけるてらしつかすまる人を携て

うちわすえうりこちらわへつきけれは

こともいてよみくけるけり

ならへまつわけの雨はぬらつゝのきみ

らしほよみくつうしけり

寵

あきなけのみへきたるしものまゝに思ひうちゐる草枕や

きのふのさゝのわけ雨へまのわけの雨よ

人の家にやとりてあか月いてたつとて
まかり申しけれは女のよみていたせりける

よみ人しらす

えそしらぬ今心みよ命あらは我やわするゝ人やとはぬと

あひしりて侍りける人のあつまの方へ
まかりけるをおくるとてよめる

ふかやふ

雲ゐにもかよふ心のおくれねは
わかると人にみゆはかりなり

とものあつまへまかりける時によめる

よしみねのひてをか

白くものこなたかなたに立別れ心をぬさとくたく旅かな

みちのくへまかりける人によみてつかはし
ける

つらゆき

白雲のやへにかさなるをちにても思はむ人に心へたつな

人をわかれける時によみける

わかれてふことは色にもあらなくに心にしみてわひしかるらん

あひしりける人のこしのくにゝまかりて
年へて京にまうてきて又かへりける時に
よめる

凡河内みつね

かへる山なにそはありてあるかひはきてもとまらぬ名にこそありけれ

あし乃くまへ田のかけに人まよみてつゝかくる
よはのまに雪やまさらん白山のゆきとはへるもあられ我者八
みよしの山乃かけりわかく人をかのゝこてまち

川しゆき

みしかよのつくなき浦島君かかの秋をおもひつゝや
萩原のつゆのおきかへしものつゆのしけくなる
月の川しかわりてはまのかけのきよへのみ
のこゝしもあけゆくひかりはこかまよみる

ねちつしのゝはま

もろこしに鳴てたのみる春姫の別はおしくやおもはぬ

卒しもし乃ゝ

姫霞乃こしも小之いてゝまつの秋の晴思ふとはこゝやまさる
源氏さ孫のいくしへのいわこえもて田のかけよる
河の山さきにこゝみかのにおもみけの所まよく

よみ人しらず　まろめ

いろもにゆかのおものゆのかのかへのさそのかはまつ
やまさきよろれたへのしをおもくそ
月の人くまのかてのへそのくもみし二を
おもひみけのまよる

源氏孫

人やりの道ならなくにおほかたはいきうしといひていさかへりなん

今はこれよりかへりねとさねかいひけるおりに
よみける　藤原かねもち

したはれてきにし心の身にしあれはかへるさまには道もしられす

藤原のこれをかかむさしのすけにまかりける
時におくりにあふさかをこゆとてよみける
つらゆき

かつこえてわかれもゆくかあふ坂は人たのめなる名にこそ有けれ

おほえのちふるかこしへまかりけるむまのはなむけ
によめる

藤原のかねすけの朝臣

君かゆくこしの白山しらねとも雪のまにまにあとはたつねん

人の花山にまうてきて夕さりつかたかへりなん
としける時によめる

僧正遍昭

夕暮のまかきは山とみえななんよるはこえしとやとりとるへく

山にのほりてかへりまうてきて人々わかれ
けるついてによめる

幽仙法師

わかれをはやまのさくらにまかせてんとめんとめしは花のまにまに

うりんゐんのみこの舎利會に山にのぼりてかへりけるに桜のもとにてよめる

僧正遍昭

山風に桜吹まき乱なん花のまぎれに立とまるべく

幽仙法し

ことならば君とまるべくにほはなむかへすは花のうきにやはあらぬ

仁和のみかどみこにおはしましける時にふるのたき御らんじにおはしましてかへり給ひけるによめる

兼藝法師

あかずしてわかるゝ涙たきにそふ水まさるとやしもは流るゝ

かんなりのつぼにめしたりける日おほみきたうべて雨のいたくふりければ夕さりまで侍りてまかりいでけるをりにさか月をとりて

貫之

秋萩の花をば雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ

とよめりければかへし

兼覧王

をしむらん人の心をしらぬまに秋のしぐれと身ぞふりにける

かねみのおほきみにはじめて物がたりしてわかれける時によめる

みつね

別るれとうれしくもあるかこよひよりあひみぬさきになにを恋まし

題しらす　よみ人しらす

あかすしてわかるゝ袖の白玉を君かかたみとつゝみてそゆく

限なくおもふ涙にそほちぬる袖はかはかしあはむ日まてに

かきくらしことはふらなむ春雨にぬれきぬきせて君をとゝめむ

しひてゆく人をとゝめむ桜花いつれを道とまとふまてちれ

志賀の山こえにていしゐのもとにて物いひける

人のわかれける折によめる

つらゆき

むすふ手のしつくにゝこる山の井のあかても人にわかれぬるかな

道にあへりける人のくるまにものいひつきて

わかれける所にてよめる

とものり

したの帯のみちはかたかたわかるとも

ゆきめくりてもあはむとそおもふ

古今和歌集巻第九

羇旅哥

もろこしにて月を見てよみける

安倍仲麿

あまの原ふりさけみれはかすかなるみかさの山にいてし月かも

此哥ハむかしなかまろをもろこしにものならはしにつかはしたりけるにあまたの年をへてえかへりまうてこさりけるを此くにより又つかひまかりいたりけるにたくひてまうてきなむとていてたちけるにめいしうといふ所のうみへにてかのくにの人むまのはなむけしけり夜になりて月のいとおもしろくさしいてたりけるを見てよめるとなむかたりつたふる

おきのくにゝなかされける時に舟にのりていてたつとて京なる人のもとにつかはしける

小野たかむらの朝臣

わたの原やそしまかけてこき出ぬと人にはつけよあまのつり舟

題しらす　よみ人しらす

都いてゝけふみかの原いつみ河かは風さむし衣かせやま

かくしつる明石の浦の朝霧に島かくれゆく舟をしそ思ふ

此哥は或人のいはく此哥も人丸や

東乃方へともとする人ひとりふたりいさなひ
ていきけりや三河国八橋といふ所にいたりける
にその河のほとりにかきつはたいとおもしろくさき
たりけるを見て木の陰におりゐてかきつはたといふいつ
もしを句のかみにすへて旅の心をよまんとて
よめる

在原業平朝臣

から衣きつゝなれにしつましあれははるはるきぬる旅をしそ思ふ

むさしの国と下つ総の国との中にある
角田川のほとりにいたりて都のいと恋しう
おほえけれはしはし川のほとりにおりゐて思
ひやれはかきりなくとをくもきにけるかなと
思ひわひてなかめをるに渡守はや舟
にのれ日もくれぬといひけれは舟にのりてわ
たらんとするにみな人物わひしくて京に思ふ
人なくしもあらすさるおりしも白き鳥の
はしとあしとあかき川のほとりにあそひけり
京にはみえぬ鳥なれはみな人見しらす渡
守にとひけれはこれなん都鳥といひけるをき

よしなる都鳥といひけるをきゝてよめる
名にしおはゞいざ事とはむ都鳥わがおもふ人はありやなしやと
題しらず　よみ人しらず
きたへゆく雁ぞ鳴なるつれてこしかずはたらでぞかへるべらなる
此哥はある人男女もろともに人のくにへ
まかりけり男まかりいたりてすなはち
みまかりにければ女ひとり京へかへる
道にかへる雁のなきけるをきゝてよめる
となむいふ
あづまの方より京へまうでくとて道に
てよめる　おと
山かくす春のかすみぞうらめしきいづれ都のさかひなるらむ
こしのくにへまかりける時白山をみてよ
める　みつね
きえはつる時しなければこし路なる白山の名は雪にぞ有ける
あづまへまかりける時道にてよめる
つらゆき
いとによるものならなくに別路の心ぼそくもおもほゆるかな
かひのくにへまかりける時みちにてよめる
みつね

よをさむみおくはつ霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝひねぬ

たちまの国のゆへまかりける時にふたみの浦

といふ所にとまりて夕さりのかれいひたうへ

けるにともにありける人のうたよみけるついてに

よめる

藤原のかねすけ

夕月夜おほつかなきを玉くしけ二見の浦はあけてこそみめ

これたかのみこのともにかりにまかりける時に

あまの河といふ所の河のほとりにおりゐて

さけなとのみけるついてにみこのいひけらく

かりしてあまの河原にいたるといふ心をよみ

てさかつきはさせといひけれはよめる

在原業平朝臣

かりくらしたなはたつめにやとからむ天河原に我はきにけり

みこ此哥をかへすかへすよみつゝかへしえせすなりに

けれはともに侍りてよめる

きのありつね

ひとゝせにひとたひきます君まてはやとかす人もあらしとそ思ふ

朱雀院のならにおはしましける時にたむけ山にて

よみける

すかはらの朝臣

此たひはぬさもとりあへすたむけ山紅葉の錦神のまにまに

素性法師

たむけにはつゝりの袖もきるへきにもみちにあける神やかへさむ

古今和歌集巻第十

物名

うくひす　藤原としゆきの朝臣

心から花のしつくにそほちつゝうくひすとのみ鳥の鳴らん

ほとゝきす

くへきほとゝきすきぬれや待わひて鳴なる聲の人をとよむる

うつせみ　在原しけはる

浪のうつせ見れは玉そみたれけるひろはゝ袖にはかなからむや

返し　みふのたゝみね

たもとよりはなれて玉をつゝまめやこれなむそれとうつせみむかし

うめ　讀人不知

あなうめにつねなるへくも見えぬかなこひしかるへきかはにほひつゝ

かにはさくら　つらゆき

かつけとも浪のなかにはさくられて風ふくことにうきしつむ玉

すもゝの花

今いくか春しなけれはうくひすもものはなかめて思ふへらなり

からもゝのはな　ふかやふ

あふからもものはなほこそかなしけれ別れむことをかねて思へは

たちはな　をのゝしけかけ

足引の山たちはなれ行雲のやとりさためぬ世にこそ有けれ

をかたまの木　とものり

み吉野のよしのゝ瀧にうかひいつるあわをか玉のきゆと見つらむ

やまかきの木　よみ人しらす

秋はきぬもみちはやとにふりしきぬ道ふみわけてとふ人はなし

あふひかつら

かくはかりあふ日のまれになる人をいかゝつらしと思はさるへき

人めゆゑのちにあふ日のはるけくはわかつらきにや思ひなされむ

くたに　僧正遍昭

散ぬれはのちはあくたになる花を思ひしらすもまとふてふかな

さうひ　つらゆき

我はけさうひにそみつる花の色をあたなる物といふへかりけり

をみなへし　　とものり

白露を玉にぬくとやさゝかにの花にも葉にもいとをみなへし

朝露をわけそほちつゝ花見むと今そ野山をみなへしりぬる

朱雀院乃をみなへしあはせの時にをみなへしといふ五文字をくのかしらにをきてよめる

つらゆき

をくら山みねたちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人そなき

きちかうの花　　とものり

秋ちかう野はなりにけり白露のをけるくさ葉も色かはりゆく

しをに　　よみ人しらす

ふりはへていさ古里の花見むとこしをにほひそうつろひにける

りうたんの花　　とものり

我やとの花ふみしたく（ちらす）鳥うたむ野はなけれはやこゝにしもくる

をはな　　讀人不知

ありとみてたのむそかたきうつせみのよをはかなしとおもひつるかな

けにこし　　やたへ乃名実

うちつけにこしとや花の色をみむをく白露のそむるはかりを

二条后春宮乃みやす所と申ける時めとにけつり花

させりけるをよませ給ける

夕立やみて

花乃木にかゝりし露をふくかせにこのまかけなる
しのふくさ　き乃ふはなき
山のはにしはしかゝれる里は貝のあつむる数
やかし　年わけゆき
郭公み林の中しまつやまはあれしはきけとみかのしのさき
つけはき　よみ人しらす
うつ蝉のなきしはしの山の紅葉かさかさ
つれなくさ　ちのやま秋
うかむ乃露にあやのいわしきかけのなはあつわれなと

さらにけ　春のはしめ乃しつく
花の色いつもこのかけはさもちらんこのさけ
ふかゝけ　しきもろ
命にて嵐のなかの花のおもへ鳴のなへ出
うはらけ　春乃よのゆかきく
さよ経けてあつきはすゝ月影のみまちのやま風
をしむ　まそいにし
歌ちやしをみね草のいろ秋の心になりもぬる
さゝまりいいもせむと
きのめし

いさゝめに時まつまにそ日はへぬる心はせをは人にみえつゝ

なし　なつめ　くるみ

兵衛

あちきなしなけきなつめそうき事にあひくるみをはすてぬものから

からことゝいふ所にて春のたちける日よめる

安倍清行朝臣

浪の音のけさからことにきこゆるは春のしらへやあらたまるらむ

いかゝさき　　かねみのおほきみ

かちにあたる浪のしつくを春なれはいかゝさきちる花とみさらむ

からさき　　あほのつねみ

かのかたにいつからさきにわたりけむ浪ちは跡ものこらさりけり

伊せ

浪の花おきからさきてちりくめり水の春とは風やなるらむ

かみやかは　　つらゆき

うはたまのわかくろかみやかはるらむかゝみのかけにふれる白雪

よとかは

足引の山へにをれは白雲のいかにせよとかはるゝ時なき

かたの　　たゝみね

夏草のうへはしけれるぬま水のゆく方のなき我心かな

かつらみや　　源ほとこす

照くれし月のひかりのさやけさは花こゝちしてちりかゝりけり
百和香　よみ人しらす
花しみの千々にしくれなれはいつもかはらしこゝろのうち
すみなし　しけり
春の夜とあかしかねたちよするかをは照くらかりけりこそ見へ
をき火　みやこのよしの
おもはぬ川ちりにしみぬる流川をきしもはやうこゝにもえし
ちまうさ　大江の里
のちまつる戸をくれて加はるへきかたちあるかなわれおもひて
ちとりしめつをもて身にしみのをそのけ二あ

佛乃弟子よ見えし人の心にしみ(?)にほひ見えける
僧正聖寶
いなの風のめくりのあくやとてそらをゆけは
仁和寺にちり出てきつ

古今和歌集巻第十一

恋歌一

題しらす

よみ人しらす

郭公鳴やさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋もするかな

素性法師

音にのみきくの白露夜はおきてひるは思ひにあへすけぬへし

紀貫之

よしの河いは浪たかく行水のはやくそ人を思ひそめてし

藤原勝臣

白浪のあとなき方にゆく舟も風そたよりのしるへなりける

在原元方

音羽山をとにきゝつゝ相坂の関のこなたに年をふるかな

立かへりあはれとそ思ふよそにても人に心をおきつ白浪

つらゆき

世中はかくこそ有けれ吹風のめに見ぬ人も恋しかりけり

右近の馬場のひをりの日むかひにたてたりける車のしたすたれより女のかほのほのかに見えけれは よむてつかはしける

在原なりひらの朝臣

見すもあらす見もせぬ人の恋しくはあやなくけふやなかめくらさむ

返し　　　　よみ人しらず

志るしらぬなにかあやなくわきていはむ思ひのみこそしるへ成けれ

かすかのまつりにまかれりける時に物見にいてたりける女のもとに家をたつねてつかはせりける

みふのたゝみね

春日野乃雪まをわけておひいてくる草のはつかにみえし君はも

人乃花つみしける所にまかりてそこなりける人のもとにのちによみてつかはしける

つらゆき

山桜霞のまよりほのかにもみてし人こそこひしかりけれ

題しらす　　　　もとかた

たよりにもあらぬ思ひのあやしきは心を人につくる成けり

凡河内みつね

初雁乃はつかにこゑをきゝしより中空にのみ物を思ふかな

つらゆき

逢事は雲ゐはるかになる神の音にきゝつゝ恋わたるかな

読人不知

かたいとをこなたかなたによりかけてあはすは何を玉のをにせむ

夕暮は雲のはたてに物そ思ふあまつそらなる人をこふとて

かりこもの思ひみたれて我こふといもしるらめや人しつけすは

つれなき人をやねたく白露のおくとはなけきぬとはしのはん

千早振かもの社のゆふたすきひとひも君をかけぬ日はなし

我恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれとも行方もなし

するかなる田子の浦浪たゝぬ日はあれとも君をこひぬ日はなし

夕月夜さすや岡への松の葉のいつともわかぬ恋もするかな

足曳の山下水のこかくれてたきつ心をせきそかねつる

吉野河いはきりとほし行水の音にはたてし恋はしぬとも

瀧つ瀬の中にもよとはありてふをなと我恋のふちせともなき

山たかみ下行水のしたにのみ流てこひむ恋はしぬとも

思ひいつるときはの山の岩つゝしいはねはこそあれ恋しき物を

人しれす思へはくるし紅のすゑつむ花の色に出なん

秋の野のお花にましり咲花の色にやこひんあふよしをなみ

わかそのの梅のほつえに鶯のねに啼ぬへき恋もするかな

足曳の山郭公わかことや君にこひつゝいねかてにする

夏なれはやとにふすふるかやり火のいつまて我身下もえをせん

恋せしとみたらし河にせしみそき神はうけすそ成にけらしも

哀てふことたになくは何をかは恋のみたれのつかねをにせん

思ふにはしのふることそまけにける色には出しと思ひし物を

我恋を人しるらめや敷妙の枕のみこそしらはしるらめ

あさちふのをのゝ篠原忍ふとも人しるらめやいふ人なしに

人は我のうらやましあれ紀のよろつけり世に遠くよしの事ぶ
思ふことなれしもあるなかやうてきけくらに取
いて我を人なくつうそあやあのゆめなりて捨ぶ沈う
伊勢の海に釣するあまのうきなやしふかくと定めよう
いその海のあまの心は縄手とくへくなしとのまや思ひてらし
涙河たえぬ水よりもなみたあふるゝ床の中のうたたねまくら
夕暮はあはれは見つにも枕はねなはまさりことわしはあはれなる
朝なくなたけ河瀬のそこの水ならぬなにのあはれ成なり
恋すゝかなけれはわしらの思乱て枕の上そなく
寝ぬ夜も夕暮の寺の時はたくすら人は志けりき

よしやなほ枕さためん方もなしいかに寝し夜か夢に見えけん
恋しさはおなしこゝろにあらすともこよひのやすらかにあるへけり
人の身もならはしものをあはすしていさ心見ん恋やしぬると
思ふとも恋ふともあはむものなれや結ふ手もたゆくとくる下紐
まくらよりあとより恋成なる人の前にも我なき人を昔に思ひ
けれはとて人をこゝろに思ひ出る事なれは歎けはなけ
涙川なかれてもけりなに思ひ思ひ人を思ふにたえなまし
人を思ふ心は我にあらねはや身のまよふたに我たにそ
思ひやるこゝろはもとにはなれやすき夜にて逢坂の関人のなき
夢の中にあはれに見えて寝覚めのこゝろくるしき霄は枕さため

恋し袖にするわさなりしも玉尽よりはすゑのは夏を見けり
涙河枕なかるゝ袖には夏をもさてたにみるすゑなりける
恋すれは我身は影と成さりとて人にそはぬ思ひ尽せぬ
かゝらぬ人にあはれと思ひ我身のうきにもつれ涙の河にうきてもかな
かゝらぬ人の乱れてなけき涙は流て下にはうかれ成けす
早きせにみなそことは我袖の涙のかゝる人にあはれ
あまる人にうち思ひもの浪のへに乱ての事やあらかき
わりなさ入江の白浪乃立てしや人をうらみとは
人しれぬ思ひを常にするかものかにそ我身成けれ
下に島乃影をきえて思ひおく山のかけて人はあらは

逢坂の関に行人も我のみや恋しき鶴の鳴音
関のそなたの関に清水いてゝ行かへる人は袖なれ
うき草の人はさそふ水あらは涼しくなれぬる人の音か
身流でよるへ影もなくのみのあはれといふもの
何の人にすゝめてさやかに昔に思ひし人にまさる
ますわかくて影なしもれての月にあはれ見ぬなき
春そ消る秋の残る君かゝりて我をいけなき
あはそなたのあはれにかたらはや宵の中をも袖に
夏虫乃影はなつかしきもかはらぬかな成らむ
夕ま暮はいかにせむ我袖は坂の名をまさる

いつとても恋しからすはあらねとも秋の夕はあやしかりけり

秋の田のほにこそ人を恋さらめなとか心にわすれしもせん

秋の田のほの上をてらす稲妻の光のまにも我やわするゝ

人めもる我かはあやな花すゝきなとかほに出て恋すしもあらん

あは雪のたまれはかてにくたけつゝ我物思ひのしけき比かな

奥山のすかのねしのきふる雪の
けぬとかいはん恋のしけきに

古今和歌集巻第十二

恋哥二

題しらす　小野小町

思ひつゝぬれはや人の見えつらん夢としりせはさめさらましを

うたゝねに恋しき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき

いとせめて恋しき時はむは玉の夜の衣を返してそきる

素性法師

秋風の身にさむけれはつれもなき人をそ頼むくるゝ夜ことに

しもついつもてらに人のわさしける日真せい
法師のたうしにていへりける言葉を哥によみて

みてをのゝこまちのもとにつかはせりける

あへのきよゆきの朝臣

つゝめとも袖にたまらぬ白玉は人をみぬめの涙なりけり

返し

こまち

おろかなる涙そ袖に玉はなす我はせきあへすたきつ瀬なれは

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原としゆきの朝臣

恋わひてうちぬるなかに行かよふ夢のたゝちはうつゝならなん

住の江の岸による浪よるさへや夢のかよひち人めよくらん

をのゝよしき

わか恋はみ山かくれの草なれやしけさまされとしる人のなき

紀とものり

よひのまもはかなくみゆる夏虫にまとひまされる恋もするかな

夕されは蛍よりけにもゆれともひかりみねはや人のつれなき

さゝの葉におく霜よりも独ぬるわか衣てそさえまさりける

我宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてそ恋しかりける

川の瀬になひく玉ものみかくれて人にしられぬ恋もするかな

みふのたゝみね

かきくらしふる白雪のしたきえにきえて物思ふころにもあるかな

藤原おきかせ

君こふる涙のとこにみちぬれはみをつくしとそ我は成ける
しぬる命いきもやすると心みに玉の緒はかりあはんといはなん
侘ぬれはしひて忘んと思へとも夢といふ物そ人たのめなる
よみ人しらす
わりなくもねてもさめても恋しきか心をいつちやらは忘れん
恋しきにわひてたましゐまとひなはむなしきからの名にやのこらん
紀貫之
君こふる涙しなくはから衣むねのあたりは色もえなまし
題しらす
よとともになかれてそ行涙川冬もこほらぬみなはなりけり
夢路にも露やおくらん夜もすからかよへる袖のひちてかはかぬ
素性法師
はかなくて夢にも人をみつる夜はあしたの床そおきうかりける
藤原たゝゆき
偽の涙なりせはから衣しのひに袖はしほらさらまし
大江千里
ねになきてひちにしかとも春雨にぬれにし袖ととはゝこたへん
としゆき乃朝臣
我ことく物やかなしき郭公時そともなく夜たゝなくらん
つらゆき

さ月やま梢をたかみ郭公なく音そらなる恋もするかな

凡河内みつね

秋霧のはるゝ時なき心にはたちゐのそらもおもほえなくに

清原ふかやぶ

虫のことこゑにたてゝはなかねとも涙のみこそしたになかるれ

これさたのみこの家の哥合のうた

よみ人しらす

秋なれは山とよむまて鳴鹿に我おとらめや独ぬるよは

題しらす

貫之

秋のゝにみたれて咲る花の色のちくさに物を思ふころかな

みつね

独して物を思へは秋の田のいなはのそよといふ人のなき

ふかやぶ

人を思ふ心はかりにあらねとも雲ゐにのみも鳴わたるかな

たゝみね

秋風にかきなすことのこゑにさへはかなく人の恋しかるらん

つらゆき

まこもかる淀の沢水雨ふれは常よりことにまさる我恋

やまとに侍ける人につかはしける

こえぬまは吉野の山の桜花人つてにのみきゝわたるかな

やよひはかりに物のたうひける人のもと
に又人まかりつゝせうそこすときゝて讀て
つかはしける
露ならぬ心を花におきそめて風吹ことに物思ひそつく
題しらす　坂上これのり
我恋にくらふの山の桜花まなくちるともかすはまさらし
むねをかのおほより
冬川のうへはこほれる我なれや下になかれて恋渡るらん
たゝみね
滝つせにねさしとゝめぬ浮草のうきたる恋も我はする哉

とものり
宵々にぬきて我ぬるかり衣かけて思はぬ時のまもなし
東路のさやの中山中々になにしか人を思ひそめけん
しきたへの枕の下に海はあれと人をみるめはおひすそ有ける
年をへてきえぬ思ひは有なから夜の袂は猶こほりけり
つらゆき
我恋はしらぬ山路にあらなくにまよふ心そわひしかりける
紅のふりいてつゝなく涙には袂のみこそ色まさりけれ
白玉とみえし涙も年ふれはからくれなゐにうつろひにけり
みつね

夏虫をなにかいひけん心から我も思ひにもえぬへらなり

たゝみね

風ふけは峯にわかるゝ白雲のたえてつれなき君か心か

月影にわか身をかふる物ならはつれなき人もあはれとや見ん

ふかやふ

こひしなはたか名はたゝし世中のつねなき物といひはなすとも

貫之

津の国の難波の葦のめもはるにしけきわか恋人しるらめや

てもふれて月日へにける白まゆみおきふしよるはいこそねられね

人しれぬ思ひのみこそわひしけれわかなけきをはわれのみそしる

とものり

ことにいてゝいはぬはかりそみなせ河したにかよひてこひしき物を

みつね

君をのみ思ひねにねし夢なれはわか心からみつるなりけり

たゝみね

命にもまさりて惜くある物はみはてぬ夢のさむるなりけり

はるみちのつらき

梓弓ひけはもとすゑ我かたによるこそまされ恋の心は

みつね

わか恋はゆくへもしらすはてもなしあふをかきりと思ふはかりそ

我のみぞかなしかりける彦星もあはですぐせる年しなければ

ふかやぶ

今ははや恋しなましをあひ見んとたのめし事ぞ命なりける

みつね

たのめつゝあはで年ふるいつはりにこりぬ心を人はしらなん

とものり

いのちやはなにぞは露のあだものをあふにしかへば

惜からなくに

古今和歌集巻第十三

恋哥三

やよひのついたちよりしのびに人にものらいひてのちに雨のそぼふりけるによみてつかはしける

在原業平朝臣

おきもせずねもせで夜をあかしては春の物とてながめくらしつ

業平朝臣の家に侍りける女のもとによみてつかはしける

としゆきの朝臣

つれづれのながめにまさる涙河袖のみぬれてあふよしもなし

かの女にかはりて返しによめる

在はらの業平

あさみこそ袖はひつらめ涙川身さへなかるときかはたのまん

返し　よみ人しらず

よるへなみ身をこそとをくへたてつれ心は君か影と成にき

いたつらに行ては来ぬる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ

あはぬよのふる白雪とつもりなは我さへともにけぬへき物を

此哥はある人のいはく柿本人丸か哥なり

在はらの業平

秋のゝにさゝわけしあさの袖よりもあはてこしよそひちまさりける

小野小町

みるめなき我身をうらとしらねはやかれなてあまのあしたゆくくる

源宗于朝臣

あはすしてこよひ明なは春の日のなかくや人をつらしと思はん

みふのたゝみね

有明のつれなくみえし別より暁はかりうき物はなし

ありはらのもとかた

逢事のなきさにしよる浪なれは恨てのみそ立かへりける

よみ人しらす

かねてより風にさきたつ浪なれや逢事なきにまたき立らん

たゝみね

陸奥にありといふなる名とり川なき名とりてはくるしかりけり　忠岑

みはるのありすけ

あやなくてまたきなき名のたつた川わたらてやまむものならなくに

もとかた

人はいさ我はなき名の惜しけれは昔も今もしらすとをいはむ

読人不知

こりすまに又もなき名はたちぬへし人にくからぬ世にしすまへは

ひんかしの五条わたりに人をしりおきてまかり
かよひけりしのひなる所なりけれはかとよりしも
えいらてかきのくつれよりかよひけるをたひ
かさなりけれはあるしきゝつけてかの道に
よことに人をふせてまもらすれはいきけれと
えあはてのみかへりてよみてやりける

なりひらの朝臣

人しれぬ我かよひ路の関守はよひよひことにうちもねななむ

題しらす　つらゆき

しのふれとこひしき時はあしひきの山より月のいてゝこそくれ

よみ人しらす

恋ひ恋ひてまれにこよひそ逢坂のゆふつけ鳥はなかすもあらなむ

をのゝこまち

秋の夜も名のみなりけりあふといへはことそともなく明ぬるものを

凡河内みつね

なかしとも思ひそはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれは

よみ人しらす

志のゝめのほからほからと明行はおのかきぬきぬなるそかなしき

藤原国経朝臣

明ぬとて今はの心つくからになと言しらぬ思ひそふらん

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

としゆきの朝臣

明ぬとてかへる道にはこきたれて雨も涙もふりそほちつゝ

題しらす　寵

志のゝめの別を惜しみ我そまつ鳥より先になき始めつる

よみ人しらす

郭公夢かうつゝか朝露のおきて別れし暁の声

玉くしけあけは君か名たちぬへみ夜ふかくこしを人見けむかも

大江千里

けさはしもおきけむ方もしらさりつ思ひ出るそ消てかなしき

人にあひてあしたによみてつかはしける

業平朝臣

ねぬる夜の夢をはかなみまとろめはいやはかなにもなりまさる哉

業平朝臣のいせの国にまかりたりける時
斎宮なりける人にいとみそかにあひて又
のあしたに人やるすべなくて思ひをりける
あひだに女のもとよりおこせたりける

よみ人しらず

君やこし我やゆきけむおもほえず夢か
うつゝかねてかさめてか

なりひらの朝臣

かきくらす心のやみにまどひにき夢現とは世人さだめよ

読人不知

むばたまのやみのうつゝはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり

さよふけて天の門わたる月影にあかずも君をあひ見つるかな

君が名もわが名もたてじ難波なるみつともいふなあひきともいはじ

名とり川せゞの埋木あらはればいかにせむとかあひ見そめけむ

よしの河水の心ははやくとも滝の音にはたてじとぞ思ふ

恋しくは下にを思へ紫のねずりの衣色にいづなゆめ

をのゝはるかぜ

花すゝきほにいでゝ恋ひば名ををしみしたゆふ紐のむすぼほれつゝ

たちばなのきよきがしのびにあひしれりける
女のもとよりおこせたりける

よみ人しらず

思ふどちひとり〳〵が恋しなば誰によそへて藤衣きん

返し　たちばなのきよき

泣こふる涙に袖のそぼちなばぬぎかへがてら夜こそはきめ

題しらず　こまち

現にはさもこそあらめ夢にさへ人めをもると見るがわびしさ

限なき思のまゝによるもこん夢路をさへに人はとがめじ

夢路には足もやすめずかよへども現にひとめ見しごとはあらず

よみ人しらず

おもへども人めつゝみの高ければ河と見ながらえこそ渡らね

滝つせのはやき心を何しかも人めつゝみのせきとゞむらん

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

きのとものり

紅の色には出じかくれぬの下にかよひて恋はしぬとも

題しらず　みつね

冬の池にすむにほどりのつれもなくそこにかよふと人にしらすな

さゝの葉におく霜の夜をさむみしみはつくとも色にいでめや

よみ人しらず

山しなの音羽の山の音にだに人のしるべくわがこひめかも

此歌ある人あふみのうねめのとなん申

きよはらのふかやぶ

みつしほの流ひるまをあひかたみみるめの浦によるをこそまて

平貞文

浪イ

白川のしらすともいはし底きよみ流て世々にすまんと思へは

とものり

したにのみこふれはくるし玉の緒のたえてみたれん人なとかめそ

我恋をしのひかねてはあしひきの山橘の色に出ぬへし

よみ人しらす

おほかたは我名もみなとこき出なん世をうみへたにみるめすくなし

平貞文

枕より又しる人もなきこひを涙せきあへすもらしつるかな

読人不知

風ふけは浪うつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬへらなり

此哥はある人のいはくかきのもとの人丸か哥也

池にすむ名ををし鳥の水をあさみかくるとすれとあらはれにけり

逢事は玉のをはかりなのたつは吉野の川の滝つせのこと

村鳥のたちにしわか名今更にことなしふともしるしあらめや

君により我名は花に春霞野にも山にも立みちにけり

伊勢

しるといへは枕たにせてねしものをちりならぬ名の

そらにたつらん

古今和歌集巻第十四

恋哥四

題しらす　　よみ人しらす

陸奥乃あさかの沼の花かつみかつみる人に恋やわたらん

あひみすは恋しき事もなからまし音にそ人をきくへかりける

つらゆき

いその神ふるの中道なかなかにみすは恋しと思はましやは

藤原のたゝゆき

君といへはみまれみすまれ富士のねのめつらしけなくもゆるわか恋

いせ

夢にたにみゆとはみえし朝なあさなわか面影にはつる身なれは

よみ人しらす

石間ゆく水の白波立かへりかくこそはみめあかすも有哉

いせのあまの朝な夕なにかつくてふみるめに人をあくよしも哉

とものり

春霞たなひく山の桜花みれともあかぬ君にも有哉

ふかやふ

心をそわりなき物と思ひぬるみる物からや恋しかるへき

凡河内みつね

かれはてん後をはしらて夏草のふかくも人のおもほゆる哉

よみ人しらす

あすか川淵は瀬となる世なりとも思ひそめてん人は忘れし

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

思ふてふ言の葉のみや秋をへて色もかはらぬものにはあるらん

題しらす

小莚に衣かたしき今宵もや我をまつらん宇治の橋姫

又はうちのたまひめ

君やこん我やゆかんのいさよひに槙の板戸もさゝすねにけり

そせいほうし

今こんといひし許に長月の有明の月を待出つるかな

よみ人しらす

月夜よし夜よしと人につけやらはこてふに似たり待すしもあらす

君こすは閨へもいらし濃紫我もとゆひに霜はをくとも

宮きのゝもとあらの小萩露をおもみ風をまつこと君をこそまて

あなこひし今もみてしか山かつの垣ほにさける山となてしこ

津の国のなには思はす山城のとはにあひみんことをのみこそ

つらゆき

敷嶋のやまとにはあらぬから衣ころもへすして逢よしもかな

ふかやふ

恋しとはたか名つけゝん事ならん死ぬとそたゝにいふへかりける

よみ人しらず

みよしのゝおほかはのへの藤浪のなみに思はゝわかこひめやは

かくこひむものとは我も思ひにき心のうらそまさしかりける

天乃原ふみとゝろかしなる神も思ふ中をはさくるものかは

あつさ弓ひきのゝつゝら末つゐにわか思ふ人にことのしけゝむ

このうたはある人あめのみかとのあふみのうねめにたまへりけるとなむ

夏ひきのてひきのいとをくりかへしことしけくともたえむと思ふな

此哥は返しによみてたてまつりけるとなむ

里人のことは夏野のしけくともかれゆく君にあはさらめやは

藤原敏行朝臣の業平朝臣の家なりける女をあひしりて文つかはせりけることはにいままうてくあめのふりけるをなむ見わつらひ侍るといへりけるをきゝてかの女にかはりてよめりける

在原業平朝臣

かすかすに思ひおもはすとひかたみ身をしる雨はふりそまされる

ある女の業平朝臣をところさためすありきすとおもひてよみてつかはしける

よみ人しらず

おほぬさのひくてあま多になりぬれは思へとえこそたのまさりけれ

返し　　　　　　　なりひらの朝臣

おほぬさと名にこそたてれなかれてもつゐによるせはありといふ物を

題しらす　　　　　よみ人しらす

すまのあまの塩やく煙風をいたみおもはぬかたにたなひきにけり

玉かつらはふ木あまたになりぬれはたえぬ心のうれしけもなし

たか里によかれをしてか郭公たゝこゝにしもねたるこゑする

いて人はことのみそよき月草のうつし心はいろことにして

いつはりのなき世なりせはいかはかり人のことのはうれしからまし

いつはりと思ふものから今更にたかまことをか我はたのまん

素性法師

秋風に山の木のはのうつろへは人の心もいかゝとそおもふ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた　　　とものり

蝉のこゑきけはかなしな夏衣うすくや人のならんと思へは

題しらす　　　　　よみ人しらす

うつ蝉の世の人ことのしけゝれはわすれぬもののかれぬへらなり

あかてこそ思はん中ははなれなめそをたにのちのわすれかたみに

忘れなんと思ふ心のつくからにありしよりけにまつそこひしき

わすれなん我をうらむな郭公人の秋にはあはんともせす

たえすゆくあすか乃河のよとみなは心あるとや人の思はん

此哥はある人のいはくなかとみのあつま人か哥也

淀川のよとむと人はみるらめと流て深き心ある物を

素性法師

そこひなき淵やはさはく山河のあさき瀬にこそあた波はたて

よみ人しらす

紅のはつ花そめの色ふかく思ひし心我わすれめや

かはらの左大臣

陸奥のしのふもちすり誰ゆへにみたれんと思我ならなくに

よみ人しらす

思ふよりいかにせよとか秋風になひくあさちの色ことになる

ちゝの色にうつろふらめとしらなくに心し秋のもみちならねは

小野小町

あまのすむ里のしるへにあらなくにうらみんとのみ人のいふらん

しもつけのをむね

くもり日の影としなれる我なれは目にこそみえね身をははなれす

つらゆき

色もなき心を人にそめしよりうつろはんとは思ほえなくに

よみ人しらす

めつらしき人をみんとやしかもせぬ我下ひものとけわたるらん

[illegible]

[illegible]

いせ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

よみ人しらす

まてといはゝねてもゆかなむしひてゆく駒のあしおれまへのたなはし

中納言源ののほるの朝臣のあふみのすけに侍ける時よみてやれりける

閑院

相坂のゆふつけ鳥にあらはこそ君かゆききをなくなくもみめ

題しらす　伊勢

古郷にあらぬものから我ために人の心のあれて見ゆらん

寵

山かつのかきほにはへるあをつゝら人はくれともことつてもなし

さかゐのひとさね

大空はこひしき人のかたみかは物思ふことになかめらるらん

よみ人しらす

あふまてのかたみも我はなにせむに見ても心のなくさまなくに

おやのまもりける人のむすめにいとしのひに
あひてものらいひけるあひたにおやのよふ
といひけれはいそきかへるとてもをなむぬき
おきていりにけるそのゝちもをかへすとてよめる

おきかせ

逢まてのかたみとてこそとゝめけめ涙にうかふもくつなりけり

題しらす　　よみ人しらす

形見こそ今はあたなれ是なくは
忘るゝ時もあらましものを

古今和歌集巻第十五

恋哥五

五条のきさいの宮のにしのたいにすみける人にほ
いにはあらてものいひわたりけるをむ月の十日あまり
になむほかへかくれにけるあり所はきゝけれと
えものもいはて又のとしの春梅の花
さかりに月のおもしろかりける夜こそをこひて
かの西のたいにいきて月のかたふくまてあはらなる
いたしきにふせりてよめる

在原業平朝臣

月やあらぬ春や昔のはるならぬ我身ひとつはもとの身にして

詠しらん　在原業平の朝臣

花すゝき我こそしたに思ひしかほにいでゝ人にむすばれにけり

藤原の仲平の朝臣

よそにのみきかまし物をおとは河わたるとなしにみなれそめけん

中納言兼輔

わがごとく我を思はん人もがなさてもやうきと世をこゝろみん

みつね

久方のあまつそらにもすまなくに人はよそにぞ思ふべらなる

よみ人しらず

みてもまたまたもみまくのほしければなるゝを人はいとふべらなり

きのとものり

雲もなくなぎたるあさの我なれやいとはれてのみよをばへぬらん

読人不知

花がたみめならぶ人のあまたあればわすられぬらんかずならぬ身は

うきめのみおひてながるゝうらなればかりにのみこそあまはよるらめ

伊勢

逢にあひて物思ふころの我袖にやどる月さへぬるゝかほなる

よみ人しらず

秋ならでおく白露はねざめする我手枕のしづく成けり

すまのあまの塩焼衣おさをあらみまとをにあれや君かきまさぬ
山城のよとのわかこもかりにたにこぬ人たのむ我そはかなき
あひ見ねは恋こそまされみなせ川何にふかめて思ひそめけん
暁のしきのはねかきもゝはかき君かこぬ夜は我そかすかく
玉かつら今はたゆとや吹風のをとにも人のきこえさるらん
わか袖にまたき時雨のふりぬるは君か心に秋やきぬらん
山の井のあさき心もおもはぬを影はかりのみ人のみゆらん
忘草たねとらましを逢事のいとかくかたき物としりせは
こふれとも逢夜のなきは忘草夢ちにさへやおひしけるらん
夢にたにあふ事かたくなりゆくは我やいをねぬ人やわするゝ

兼けい法師
もろこしも夢にみしかはちかかりき思はぬ中そはるけかりける
さたのほる
獨のみなかめふるやのつまなれは人を忍ふの草そおひける
僧正遍昭
わかやとは道もなきまてあれにけりつれなき人をまつとせしまに
今こんといひて別しあしたより思ひくらしのねをのみそなく
よみ人しらす
こめやとは思ふ物からひくらしのなく夕くれはたちまたれつゝ
いましはとわひにし物をさゝかにの衣にかゝり我をたのむる

今はこじと思ふ物からわすれつゝまたるゝ事のまたもやまぬか

月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなんわびつゝもねん

うへていにし秋田かるまで見えこねばけさはつかりのねにぞなきぬる

こぬ人をまつゆふぐれの秋風はいかにふけばかわびしかるらん

久しくも成にけるかな住の江の松はくるしき物にぞありける

かねみのおほきみ

住の江の松ほど久に成ぬればあしたづの音になかぬ日はなし

なかひらの朝臣あひしりて侍りけるをかれかたになりにければ父がやまとのかみに侍りけるもとへまかるとてよみてつかはしける

伊勢

みわの山いかにまちみむ年ふともたづぬる人もあらじとおもへば

題しらず　雲林院のみこ

吹まよふ野風をさむみ秋はぎのうつりもゆくか人の心の

をのゝこまち

今はとてわが身時雨にふりぬればことの葉さへにうつろひにけり

返し　小野さだき

人を思ふ心のこのはにあらばこそ風のまにまに散りも乱れめ

なりひらの朝臣きのありつねがむすめに

すみけるをうらむる事ありてしばし

あきさむみいきてかふきはくものもしらぬ秋
はよみくけりなしける
わかやとのわかれにし人の戚かさすたゆめにはみなゆめ
ぬる　　　　　　　　　　なりひらの朝臣
ゆふくれのまえのこして物かしは我かへる山の風もやすから
ぬしらん　　　　　　　　　きそのかつ乃わかきと
かゝる夜は秋は身にしみてよりは秋めかきてのこやはさへこゝは
　　　　　　　　　　ことしのなと
秋風は身にしみてこし松の月く人の心をしまてよもなから
　　　　　　　　　源宗于朝臣

いつ秋となく戚ける人の言の葉もそのかきの色も戚けり
おもひそむる人もまけるころあはれをしれて侍ける
人のしらぬこゝろをしらてのちさらに人そしれ
はよみくけりなしける
　　　　　　　　　兼盛
もろくの山葉をみるそ秋の風はけにも人はおもふらし
あはれ秋をけしき人のやうたく秋そらのさわ
けるあはれもやけしころもの色にはみえさしてつ
はよわける　　　　こよなりのあそ
ゆきて秋ゆくをのあきらかに今は思ひ出さすもけり

ものおもひけるころものへまかりける道に野火
のもえけるをみてよめる

いせ

冬かれのゝへと我身を思ひせはもえても春をまたまし物を

題しらす

とものり

水のあわのきえてうき身といひなから流ても猶たのまるゝ哉

よみ人しらす

みなせ川ありて行水なくはこそつゐに我身をたえぬとおもはめ

みつね

よしの河よしや人こそつらからめはやくいひてしことはわすれし

よみ人しらす

世中の人の心は花そめのうつろひやすき色にそ有ける

心こそうたてにくけれそめさらはうつろふ事もおしからましや

小町

色みえてうつろふ物は世中の人の心の花にそありける

よみ人しらす

我のみや世を鶯となきわひむ人の心の花とちりなは

そせいほうし

思ふともかれなん人をいかゝせむあかすちりぬる花とこそみめ

読人不知

今はとて君かかれなはわか宿の花をはひとり見てやしのはん

むねゆきの朝臣

忘草かれもやするとつれもなき人の心にしもはおかなん

寛平御時御屏風に哥かゝせ給ひける時よみてかきける

素性法師

忘草何をかたねと思ひしはつれなき人の心なりけり

題しらす

秋の田のいねてふこともかけなくに何をうしとか人のかるらん

きのつらゆき

初雁の鳴こそわたれ世中の人の心の秋しうけれは

よみ人しらす

哀ともうしとも物思ふ時はなとか涙のいとなかるらん

身をうしと思ふにきえぬ物なれはかくてもへぬる世にこそ有けれ

典侍藤原直子朝臣

海人のかるもにすむ虫の我からとねをこそなかめ世をはうらみし

いなは

あひ見ぬもうきも我身のから衣思ひしらすもとくるひもかな

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

すかのゝたゝおみ

つれなきを今はこひしと思へとも心よわくもおつる涙か

題しらず　　　伊勢

人しれすたえなましかは侘つゝもなき名そとたにいはましものを

よみ人しらず

それをたに思ふ事にて我やとをみきとないひそ人のきかくに

逢事のもはらたえぬる時にこそ人の恋しき事も知けれ

わひはつる時さへ物のかなしきはいつこをしのふ涙なるらん

藤原おきかせ

恨ても泣てもいはんかたそなき鏡にみゆる影ならすして

よみ人しらず

夕されは人なき床をうちはらひなけかんためとなれる我身か

わたつみの我身こす浪立かへりあまのすむてふうらみつるかな

あらを田をあらすきかへしかへしても人の心をみてこそやまめ

有そ海の濱のまさことたのめしは忘るゝ事のかすにそ有ける

あしへより雲ゐをさして行鴈のいやとほさかる我身かなしも

しくれつゝもみつるよりも言の葉の心の秋にあふそわひしき

秋風の吹と吹ぬるむさし野はなへて草葉の色かはりけり

小町

秋風にあふたのみこそ悲しけれ我身むなしく成ぬと思へは

平さたふん

秋風の吹うらかへすくすの葉のうらみても猶うらめしきかな

よみ人しらす

旅といへはこひにやなしてる人の秋をしらするかなはれ

三つの月はいつしの中にて人をそしる夜はあまたへにける

又いにしへのしられ人もなし

坂上これのり

あふ事をなからの橋のなからへてこひわたるまに年そへにける

ことともかみ

うきめのしけきものからはなれぬるわかれをしらぬ身は

よみ人しらす

なかきいもせのよをなからへおもひきのなかのうきよや

世中

古今和歌集巻第十六

哀傷哥

いもうとの身まかりける時よみける

小野たかむらの朝臣

なく涙雨とふらなむわたり河水まさりなはかへりくるかに

さきのおほきおほいまうちきみを白河のあたりにおくりける夜よめる

そせい法師

ちの涙おちてそ滝つ白河は君か世まての名にこそ有けれ

ほりかはのおほきおほいまうちきみ身まかり
にける時深草の山におさめてけるのちに
よみける

僧都勝延

空蝉はからを見つゝもなくさめつ深草の山煙たにたて

かむつけのみねを

深草の野への桜し心あらはことしはかりはすみそめにさけ

藤原敏行朝臣の身まかりにける時によみて
かの家につかはしける

きのとものり

ねてもみゆねてもみえけり大かたは空蝉の世そ夢には有ける

あひしりける人の身まかりにけれはよめる

きぬ〳〵恋

暮しをいふへかりけれ世中にうきてある事を思ひしらなは

あはれ我なけける人の有明の月をかなしけれはなほある

みふのたゝみね

ねやの中にみえし夜の名や暮といふものの今こそ世にや現れけり

あかつきの月影のわかれける時よりそ見え

まほろしせは涙にぬれし袖もふるしみなわかれをさしおとりてしそうね

暮すのさはねさめのしのはあはれやそ待ける

人の月まつわかにかへる時明ほのゝ空として

よみ人しらす

周防

さらぬたにわかれの中のやちたいてさく涙や水の泡のけぬや

きのふまての今日のみわかれけるにはよみける

川らのゐんさ

あすまてと我思ひしかゆふくれの空にかへらぬわかれかな

うつみね

何ゆゑか我袖や人のいつはりになみたかれぬる

ちゝのおもひにてよみける

九条右大臣

秋の月河霧に思ひしもみちはいつ俊人の袂なりけり

ちゝのおもひにてよみける

たゝみね

藤衣はつるゝいとはわひ人の涙の玉のをとそなりける

思ひに侍ける年の秋山てらへまかりける道にて
よめる　　つらゆき

朝露のおくての山田かりそめにうき世中を思ひぬるかな

おもひに侍ける人をとふらひにまかりてよめる
たゝみね

墨染乃君かたもとは雲なれやたえす涙の雨とのみふる

女のおやの思ひにて山てらに侍けるをある人
乃とふらひつかはせりけれは返事によめる

よみ人しらす

足引の山へに今はすみ染の衣の袖のひる時もなし

諒闇乃とし池のほとりの花をみてよめる
たかむらの朝臣

水乃面にしつく花の色さやかにも君のみかけのおもほゆるかな

深草のみかとの御国忌の日よめる
文屋のやすひて

草ふかき霞の谷にかけかくしてる日のくれしけふにやはあらぬ

深草のみかとの御時に蔵人の頭にてよるひる
なれつかうまつりけるを諒闇になりにけれは更に世に

さらに世にもましらすしてひえの山にのほりて
かしらおろしてけり其又のとしみな
人御ふくぬきてあるはかうふり給はりなと
よろこひけるをききてよめる

僧正遍昭

みな人は花の衣になりぬなり苔の袂よかはきたにせよ

河原のおほいまうちきみの身まかりての秋かの
家のほとりをまかりけるに紅葉の色また
ふかくもならさりけるをみてかの家により
てよみていれたりける

近院の右のおほいまうちきみ

うちつけにさひしくもあるか紅葉も主なきやとは色なかりけり

藤原のたかつねの朝臣の身まかりての又の
としの夏郭公の鳴けるをききてよめる

つらゆき

郭公けさ鳴声におとろけは君にわかれし時にそありける

桜をうへてありけるにやうやく花咲ぬへき時に
かのうへける人身まかりにけれはその花をみ
てよめる

きのもちゆき

花よりも人こそあたになりにけれいつれをさきにこひんとかみし

あるし身まかりにける人の家の梅花を見て
よめる　　つらゆき
色もかも昔のこさに匂へともうゑけん人のかけそこひしき
河原の左大臣の身まかりての後
かの家にまかりてありけるに塩かまといふ
所のさまをつくれりけるを見てよめる
君まさて煙たえにし塩かまのうらさひしくも見えわたるかな
藤原のとしもとの朝臣の右近中将にてすみ
侍けるさうしの身まかりてのち人もすますなりにけるに
秋の夜ふけて物よりまうてきけるついてに
見いれけれはもとありしせんさいもいとしけく
あれたりけるを見てはやくそこに侍けれは
むかしをおもひやりてよみける
みはるのありすけ
君かうゑしひとむらすゝき虫の音のしけき野へともなりにけるかな
これたかのみこのちゝの侍けむ時によめりけむ
歌ともとこひけれはかきておくりけるおくに
よみてかけりける　　とものり
ことならはことのはさへもきえなゝむ見れは涙のたきまさりけり
題しらす　　よみ人しらす

なき人乃宿にかよはゝ郭公かけてねにのみ鳴とつけなん

誰みよと花さけるらん白雲のたつのとはやくなりにし物を

式部卿のみこ閑院の五のみこにすみわたりける
をいくはくもあらて女みこの身まかりにける
時にかのみこのすみける帳のかたひらのひも
に文をゆひつけたりけるをとりてみれは
むかしの手にてこの歌をなんかきつけたり
ける

かすかすに我を忘れぬ物ならは山の霞をあはれとはみよ

おとこの人のくにまかれりける間に女にはかに
やまひをしていとよはくなりにける時よみを
きて身まかりにける

よみ人しらす

声をたにきかてわかるゝ玉よりもなき床にねん君そかなしき

やまひにわつらひ侍ける秋心ちのたのもし
けなくおほえけれはよみて人のもとにつかはし
ける

大江千里

もみち葉を風にまかせてみるよりもはかなき物は命なりけり

身まかりなんとてよめる

藤原これもと

露をなとあたなる物と思ひけむ我身も草におかぬはかりを

やまひしてよはくなりにける時よめる

なりひらの朝臣

つひにゆく道とはかねてききしかときのふけふとは思はさりしを

かひの国にあひしりて侍りける人とふらはんと
てまかりけるみちなかにてにはかにやまひを
しいまいまとなりにけれはよみて京に
もてまかりて母にみせよといひて人につけ
侍りけるうた

在原しけはる

かりそめのゆきかひちとそ思ひこし今は限のかとてなりけり

古今和歌集巻第十七

雑哥上

題しらす　　よみ人しらす

我うへに露そおくなる天河とわたる舟のかいのしつくか

思ふとちまとゐせるよはから錦たゝまくおしき物にそ有ける

うれしきをなにゝつゝまむ唐衣たもとゆたかにたてといはましを

限なき君かためにとおる花はときしもわかぬ物にそ有ける

ある人のいはく此哥はさきのおほいまうちきみのなり

むらさきの一もとゆへにむさしのゝ草はみなからあはれとそみる

めのおとうとをもて侍ける人にうへのきぬを
をくるとてよみてやりける

なりひらの朝臣

紫の色こき時はめもはるに野なる草木そわかれさりける

大納言ふちはらのくにつねの朝臣宰相より
中納言に成ける時そめぬうへのきぬあやを
をくるとてよめる

近院の右のおほいまうちきみ

色なしと人やみるらむ昔よりふかき心にそめてしものを

いそのかみのなむまつかみやつかへもせていそのかみといふ所に
こもり侍けるをにはかにかうふりたまはれりけれは

給はれりければよろこびいひつかはすと
てよみてつかはしける
ふるのいまみち
日のひかりやぶしわかねばいそのかみふりにし里に花もさきけり
二条のきさきのまだ東宮のみやすむ所と
申ける時におほはらのにまうで給ひける日よ
める
なりひらの朝臣
おほはらや小塩の山もけふこそは神世のことも思ひ出らめ
五節の舞姫をみてよめる
よしみねのむねさだ
あまつ風くものかよひぢふきとぢよ乙女の姿しばしとどめん
五節のあしたにかんざしの玉のおちたりける
をみてたがならんととぶらひてよめる
河原の左のおほいまうちぎみ
ぬしやたれとへど白玉いはなくにさらばなべてやあはれと思はん
寛平御時にうへのさぶらひに侍りけるをのこ
どもかめをもたせてきさいの宮の御方におほみ
きのおろしときこえにたてまつりたりけるを
くら人どもわらひてかめをおまへにもていでてとも
かくもいはずなりにければつかひのかへりきてさ

さなんありつるといひけれハくら人のなかにをくり
ける
としゆきの朝臣
玉たれのこかめやいつらこよろきの礒の浪わけおきに出に
けり
女ともの見てわらひけれハよめる
兼芸法師
かたちこそみ山かくれのくち木なれ心ハ花になさはなりなん
方たかへに人の家にまかれりける時にあるし
のきぬをきせたりけるをあしたにかへすとて
よみける
きのとものり
蝉のはのよるの衣ハうすけれとうつりかこくも匂ひぬる哉

題しらす　よみ人しらす
をそく出る月にもあるかなあしひきの山のあなたもをしむへらなり
我心なくさめかねつさらしなやをはすて山にてる月をみて
なりひらの朝臣
大かたハ月をもめてしこれそこの月もれハ人のおいとなるもの
月おもしろしとて凡河内躬恒のまうてきたりける
によめる
きのつらゆき
かつ見れとうとくもあるかな月影のいたらぬ里もあらしとおもへハ
池に月のみえけるをよめる
二なき物と思ひしを水底に山のはならて出る月かけ

題しらす　　よみ人しらす

天河雲のみをにてはやけれは光とゝめす月そなかるゝ

あかすして月のかくるゝ山もとはあなたおもてそこひしかりける

これたかのみこのかりしけるともにまかりて
やとりにかへりて夜ひと夜さけをのみものかたりをし
けるに十一日の月もかくれなむとしけるおりに
みこゑひてうちへいりなむとしけれはよみ侍ける

なりひらの朝臣

あかなくにまたきも月のかくるゝか山のはにけていれすもあらなむ

田村の御時に斎院に侍けるあきこ
けいこのみこを母あやまちありといひて
斎院をかへられむとしけるをそのことやみにけれは
よめる　　あま敬信

大空をてりゆく月しきよけれは雲かくせとも光けなくに

題しらす　　よみ人しらす

いそのかみふるからをのゝもとかしはもとの心はわすられなくに

いにしへの野中の清水ぬるけれともとの心をしる人そくむ

古のしつのをたまきいやしきもよきもさかりはありしものなり

今しこそあれ我も昔は男山さかゆく時もありこしものを

世中にふりぬる物は津の国のなからの橋と我となりけり

さゝの葉にふりつむ雪のうれをおもみもとくたちゆく我さかりはも

おほあらきのもりの下草おいぬれはこまもすさめすかる人もなし

又は さくらあさのをふの下草おいぬれは

かそふれはとまらぬものを年といひてことしはいたくおいそしにける

おしてるやなにはのみつにやくしほのからくも我はおいにけるかな

又は おほとものみつのはまへに

おいらくのこむとしりせはかとさしてなしとこたへてあはさらましを

このみつのうたは昔ありける三人のおきなの

よめるとなん

さかさまに年もゆかなむとりもあへすすくるよはひやともにかへると

とりとむる物にしあらねは年月をあはれあなうとすくしつるかな

とゝめあへすむへもとしとはいはれけりしかもつれなくすくるよはひか

鏡山いさ立よりてみてゆかむ年へぬる身は老やしぬると

此哥はある人のいはく大伴のくろぬしか也

業平朝臣の母のみこなかをかにすみ

侍りける時になりひら宮つかへすとて時〻も

えまかりとふらはす侍りけれはしはす許に

はゝのみこのもとよりとみの事とてふみをもて

まうてきたりあけてみれはことはゝなくて

ありける哥

おいぬれはさらぬ別もありといへはいよ〳〵みまくほしき君哉

返し　なりひらの朝臣

世中にさらぬ別のなくもかな千世もとなけく人の子のため

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

ありはらのむねやな

白雪のやへふりしけるかへる山かへる〳〵もおいにける哉

おなし御時のうへのさふらひにてをのこともに
おほみきたまひておほみあそひありけるついてに
つかうまつれる　としゆきの朝臣

おいぬとてなとかわか身をせめきけんおいすはけふにあはましものを

題しらす　よみ人しらす

ちはやふる宇治の橋守なれをしそあはれとは思ふ年のへぬれは

我みても久しく成ぬ住吉の岸の姫松いくよへぬらん

住吉の岸の姫松人ならはいく世かへしととはましものを

梓弓いそへの小松たか世にかよろつ世かねてたねをまきけん

此歌はある人のいはく柿本の人まろかなり

かくしつゝ世をやつくさん高砂のおのへにたてる松ならなくに

藤原おきかせ

誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

よみ人しらす

よるは海人の[illegible]塩[illegible]磯の清見[illegible]

わたつ海のかざしにさせる白妙の波もてゆへるあはち嶋山

和田の原よせくる浪のしばしばも見まくのほしき玉津嶋かも

なにはかた塩みちくらしあま衣たみのゝ嶋にたつ鳴わたる

つらゆきがいづみの国に侍りける時にやまとより

こえてまうできてよみてつかはしける

藤原たゞふさ

君を思ひおきつの濱に鳴たつの尋ねくればぞありとだにきく

返し　つらゆき

おきつ浪たかしの濱の濱松の名にこそ君を待わたりつれ

なにはにまかれりける時よめる

難波がたおふる玉もをかりそめのあまとぞ我は成ぬべらなる

あひしれりける人の住吉にまうでけるによみ

てつかはしける　たゞみね

住吉とあまはつぐともながゐすな人忘草おふといふなり

なにはへまかりける時たみのゝ嶋にて雨にあひ

てよめる　つらゆき

雨によりたみのゝ嶋をけふゆけど名にはかくれぬ物にぞ有ける

法皇にし川におはしましたりける日つる

すにたてりといふことを題にてよませたまひける

あしたつ乃たてる川辺を吹風によせてかへらぬ浪かとそみる

中務のみこの家の池に船をつくりておろしはしめてあそひける日法皇御らんしにおはしましたりけり夕さりつかたかへりおはしまさむとしけるおりによみてたてまつりける

いせ

水のうへにうかへる船の君ならはこゝそとまりといはましものを

からことゝいふ所にてよみ侍る

素性法師

都まてひゝきかよへるからことは浪のをすけて風そひきける

布引のたきにてよみ侍る

在原行平朝臣

こきちらす滝乃白玉ひろひおきて世のうき時の涙にそかる

布引の滝のもとにて人々あつまりて哥よみけるによめる

なりひらの朝臣

ぬきみたる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせはきに

よし野の滝をみてよめる

承均法師

たかためにひきてさらせる布なれや世をへてみれととる人もなき

題しらす　神退法師

清滝の瀬ゝの白糸くりためて山わけ衣おりてきましを

龍門にまうてゝ滝のもとにてよめる

いせ

たちぬはぬ衣きし人もなきものをなに山姫の布さらすらん

朱雀院の御門布引の滝御らんせんとて
ふん月の七日の日おはしましける時
さふらふ人々にうたよませ給ひけるによめる

たちはなのなかもり

ぬしなくてさらせる布をたなはたにわか心とやけふはかさまし

ひえの山なるおとはの滝を見てよめる

たゝみね

おちたきつ滝のみなかみとしつもりおいにけらしなくろきすちなし

おなし滝をよめる

みつね

風ふけと所もさらぬ白雲はよをへておつる水にそ有ける

田むらの御時に女はうのさふらひにて御屏風の
ゑ御らんしけるに滝おちたりける所おもし
ろしこれを題にてうたよめとさふらふ人
におほせられけれはよめる

三条乃町

思ひせく心の中乃滝なれやおつとは見れと音のきこえぬ

屏風の絵なる花をよめる

つらゆき

咲初しときよりのちはうちはへて世は春なれや色のつねなる

屏風の絵によみあはせてかきける

坂上これのり

かりてほす山田のいねのこきたれてなきこそわたれ秋のうけれは

古今和歌集巻第十八

雑歌下

題しらす　よみ人しらす

世中は何か常なるあすか川きのふの淵そけふは瀬になる

いくよしもあらし我身をなそもかくあまのかるもに思ひみたるゝ

雁のくる峯の朝霧はれすのみ思ひつきせぬ世中のうさ

小野たかむらの朝臣

しかりとてそむかれなくにことしあれはまつなけかれぬあなう世中

甲斐のかみに侍ける時京へまかりける人につかはしける

をのさたき

都人いかにととはゝ山たかみはれぬくもゐにわふとこたへよ

文屋のやすひてかみかはのそうに成てあかたみにはえいてたゝしやといひやれりける返事によめる

小野小町

侘ぬれは身をうき草のねをたえてさそふ水あらはいなんとそ思

題しらす

あはれてふ事こそうたて世中を思ひはなれぬほたし成けれ

よみ人しらす

あはれてふ言の葉ことにおく露は昔をこふる涙成けり

世中のうきもつらきもつけなくにまつしる物は涙成けり

よの中は夢かうつゝかうつゝとも夢ともしらすありてなけれは

世中にいつらわか身のありてなしあはれとやいはむあなうとやいはむ

山里は物のさひしき事こそあれ世のうきよりはすみよかりけり

これたかのみこ

白雲のたえすたなひく峯にたにすめはすみぬる世にこそ有けれ

ふるのいまみち

しりにけりきゝてもいとへ世中は浪のさはきに風そしくめる

そせい

いつこにか世をはいとはむ心こそ野にも山にもまとふへらなれ

よみ人しらす

世中は昔よりやはうかりけん我身ひとつの為になれるか

よの中をいとふ山への草木とやあなうの花の色にいてにけん

みよし野の山のあなたに宿もかな世のうき時のかくれかにせん

世にふれはうさこそまされみよしのの岩のかけ道ふみならしてん

いかならん巌の中にすまはかは世のうき事のきこえこさらん

あし引の山のまにまにかくれなんうき世中はあるかひもなし

世中のうけくにあきぬ奥山のこのはにふれる雪やけなまし

おなしもしなきうた

よのうきめみえぬ山路へいらんには思ふ人こそほたしなりけれ

山乃法師のもとへつかはしける　凡河内みつね

世を捨て山に入人山にても猶うき時はいつちゆくらん

物思ひける時いときなきこをみてよめる

今更に何おひいつらん竹のこのうきふししけき世とはしらすや

題しらす　よみ人しらす

世にふれは言の葉しけき呉竹のうきふしことに鴬そなく

木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしに我身は成ぬへらなり

ある人のいはく高津のみこの哥也

わか身から憂世中となつけつゝ人のためさへかなしかるらん

おきの国になかされて侍りける時によめる
たかむらの朝臣
思ひきや鄙のわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせむとは
田むらの御時に事にあたりて津の国のすま
といふ所にこもり侍りけるに宮のうちに侍
りける人につかはしける
在原行平朝臣
わくらはにとふ人あらはすまの浦にもしほたれつゝわふとこたへよ
左近将監とけて侍りける時に女のとふらひにおこせたりける返事によみてつかはしける
をののはるかせ
あまひこのおとつれしとそ今は思ふ我か人かと身をたとる世に
つかさとけて侍りける時よめる
平さたふん
うき世にはかとさせりとも見えなくになとかわか身のいてかてにする
ありはてぬいのちまつまのほとはかりうきことしけくおもはすもかな
みこの宮のたちはきに侍りけるを宮つかへつ
かうまつらすとてとけて侍りける時によめる
みやちのきよき
つくはねのこのもとことにたちそよるはるのみやまのかけをこひつゝ

けちかりける人のまかりにけれはなくなりてなけゝる
をみてよめりけるのなけきにかくれにしも
たまらしくはおもひよみける

清原ふかやふ

むつましき者に書きてそありけれはこれにしも散花よは
かりしに侍ける時に七条中宮うせたまひて
くら御ぬしのもとにいそてはけりける

いせ

久米乃中にかへりしことあはれむるかのまそまかりへける
紀のかしらのつかへのすまに侍りけるけに

むかしのいるむけれはくしふとのしれそれとと
ける時にあつしこに侍るあかりて更ふるる
よまくみしちわけ袖いけりける

なかはしの納言

今はとてかへる神人よる里をいてほすをふへるける
おほかたのみこ衣をもてわつらいけるとし
みなかへして所に侍けるに正月に
とかくよくまかりけるにみつのへに
ゆきもありけれは雪にゆかりし事かそへつ
乃ゆふにゆるかれてものみけるに侍り

ものかなしくてかへりまうてきて
よみておくりける
わすれては夢かとそ思ふおもひきや雪ふみわけて君をみんとは
深草のさとにすみ侍りて京へまうてくとてそこなりける
人によみておくりける
年をへてすみこし里を出ていなはいとゝ深草野とやなりなん
返し
よみ人しらす
野とならはうつらとなきて年はへんかりにたにやは君はこさらん
題しらす
我を君なにはの浦にありしかはうきめをみつのあまとなりにき
此歌はある人むかしおとこありける女の
おとことはすなりにけれはなにはなるみつの
てらにまかりてあまになりてよみておとこに
つかはせりけるとなんいへる
返し
なにはかたうらむへきまもおもほえすいつこをみつのあまとかはなる
今更にとふへき人もおもほえすやへむくらしてかとさせりてへ
ともたちの久しうまうてこさりけるもとに
よみてつかはしける
みつね

水の面におふるさ月のうき草のうき事あれやねをたえてこぬ

人をとはてひさしうありけるおりにあひ
うらみけれはよめる

身をすてゝゆきやしにけむ思ふより外なるものは心なりけり

むねをかのおほよりかこしよりまうてきたりける
時に雪のふりけるを見ておのかおもひはこの
雪のことくなむつもれるといひけるおりに
よめる

君かおもひ雪とつもらは頼まれす春よりのちはあらしと思へは

返し
宗岳大頼

君をのみおもひこしちのしら山はいつかは雪のきゆる時ある

こしなりける人につかはしける
きのつらゆき

思ひやるこしの白山しらねとも一夜も夢にこえぬよそなき

題しらす
よみ人しらす

いさこゝに我世はへなむ菅原や伏見の里のあれまくもをし

我庵はみわの山もと恋しくはとふらひきませ杉たてるかと

きせん法し

我庵は都のたつみしかそすむ世をうち山と人はいふなり

よみ人しらす

あれにけりあはれいくよの宿なれや住けん人のおとつれもせぬ

ならへまかりける時にあれたる家に女の琴
ひきけるを聞てよみていれたりける

よしみねのむねさた

侘人のすむへき宿とみるなへに歎くははる琴のねそする

はつせにまうつる道にならの京にやとれりける時よめる

二条

人ふるすさとをいとひてこしかともならの都もうき名なりけり

題しらす　よみ人しらす

世中はいつれかさしてわかならむ行とまるをそ宿とさたむる

逢坂のあらしの風はさむけれと行ゑしらねは侘つゝそぬる

風のうへにありかさためぬちりの身は行ゑもしらすなりぬへらなり

家をうりてよめる

伊勢

あすか川ふちにもあらぬ我宿もせにかはりゆく物にそ有ける

つくしに侍ける時にまかりかよひつゝこうちける
人のもとに京にかへりまうてきてつかはしける

きのとものり

古郷はみしこともあらすをのゝえのくちし所そこひしかりける

女ともたちと物かたりしてわかれてのちにつかはしける

しける　　みちのく

あかざりし袖のなかにや入にけんわがたましひのなき心ちする

寛平の御時にもろこしの判官にめされて
侍ける時に東宮のさぶらひにてをのこども
さけたうべけるついでによみ侍ける

藤原たゞふさ

なよ竹のよながきうへに初霜のおきゐて物を思ふころかな

題しらず　　よみ人しらず

風ふけばおきつ白浪たつた山よはにや君がひとりこゆらん

ある人此歌はむかし大和国なりける人の
むすめにある人すみわたりけりこの女親も
なくなりて家もわろくなりゆくあひだにこの男
かうちの国に人をあひしりてかよひつゝかれ
やうにのみなりゆきけりさりけれどもつらげ
なるけしきもみえでかうちへいくごとに男の心
のごとくにしつゝいだしやりければあやしと
おもひてもしなきまにこと心もやあるとうたがひて
月のおもしろかりける夜かうちへいく
まねにてせんざいの中にかくれてみければ夜
ふくるまでことをかきならしつゝうち歎てこの

哥よみてねにけれは是をきゝてそれより又
ほかへもまからすなりにけりとなむいひつた
へたる
たかみそきゆふつけ鳥か唐衣たつたの山におりはへてなく
わすられむ時しのへとそ浜千鳥ゆくへもしらぬあとをとゝむる
貞観御時万葉集はいつはかりつくれるそと
とはせ給ひけれはよみてたてまつりける
文屋ありすゑ
神な月時雨ふりをけるならのはの名におふ宮のふることそこれ
寛平御時哥たてまつりけるついてにたてまつり
ける
大江千里
あしたつのひとりおくれて鳴声は雲のうへまてきこえつかなん
ふちはらのかちをん
人しれす思ふ心は春霞たち出て君か目にもみえなん
歌めしける時に奉るとてよみておくにかき
つけてたてまつりける
伊勢
山河のをとにのみきくもゝしきを
身をはやなから見るよしもかな

古今和歌集巻第十九

雑躰

短哥

題しらす　　読人不知

あふことの　まれなる色に　おもひそめ　わかみはつねに
あまくもの　はるゝときなく　ふしのねの　もえつゝとはに
おもへとも　あふことかたし　なにしかも　人をうらみむ
わたつみの　おきをふかめて　思ひてし　思ひはいまは
いたつらに　なりぬへらなり　ゆく水の　たゆるときなく
かくなはに　思みたれて　ふる雪の　けなはけぬへく
おもへとも　えふのみなれは　なほやます　思ひはふかし
あしひきの　山したみつの　こかくれて　たきつこゝろを
たれにかも　あひかたらはむ　色にいては　人しりぬへみ
すみそめの　ゆふへになれは　ひとりゐて　あはれあはれと
なけきあまり　せむすへなみに　にはにいてゝ　たちやすらへは
しろたへの　衣のそてに　をく露の　けなはけぬへく
おもへとも　猶なけかれぬ　はるかすみ　よそにも人に
あはむと思へは

ふるうたたてまつりし時のもくろくのその
なかうた　　つらゆき

ちはやふる神のみよゝりくれ竹の世ゝにもたえす
あまひこのをとはの山のはるかすみ思ひみたれて
さみたれのそらもとゝろにさよふけて山ほとゝきす
なくことにたれもねさめてからにしき竜田の山の
もみちはをみてのみしのふ神無月しくれしくれて
冬のよの庭もはたれにふる雪の猶きえかへり
としことに時につけつゝあはれてふことをいひつゝ
君をのみ千代にといはふ世の人の思ひするかの
ふしのねのもゆる思ひもあかすしてわかるゝなみた
ふちころもをれる心もやちくさのことの葉ことに
すへらきのおほせかしこみまきまきの中につくすと
いせの海の浦のしほかひひろひあつめとれりとすれと
玉の緒のみしかき心思ひあへす猶あらたまの
年をへて大宮にのみひさかたのひるよるわかす
つかふとてかへりみもせぬわかやとのしのふ草おふる
いたまあらみふる春雨のもりやしぬらむ

ふるうたにくはへてたてまつれるなかうた

壬生忠岑

くれ竹のよゝのふることなかりせはいかほのぬまの
いかにして思ふ心をのはへましあはれむかしへ

わかこてね 今まつしをハ うれしされ 身ハ志とすりう
しの葉を あたり見えて きこゑあまを すゑの世までの
あはれなし 今もむかしの くるしみるハ ちわのはけしや
ちわの身に けしからしを こいうらん こゑをおもへハ
いかゝへ言 くすかけなり けさしもの 雲のかゝし言ん
いちしる ちのなさけし おもかはに 心もしけんう
たゝしく かくいわれても てなにの葉 ちの契まよひの
身成しを これハ彼れ くるしきに あさましくて
みるこそわ この上の身の みの花もわ おきしくしくも
みもかしす こゝのさきの なのしくを 嵐の色も

こゝのさわぎ 今ハのよし ちのはけれを 春ハ子ゝみよ
こゝなされ 夏ハ川せに あさくれし 蛍ハ河辺に
うつむしろ 冬ハ霜まて きえしまる 滝しき
身あのらに けしも秋の年を 志らきなをを いつのひかけ
成ま音楽 これそ秋の わくらしきる おいのみすえ
やよけれと 身ハやくて らしくの花 しのゝまさ
かくしけり なつの橋の なすの花へ やまへの浦に
こいるゝれ 浪の志はや あかり行ん すまの命
あけれハ きしめくまゝ しる山乃 かけは志らて
あかれても 谷はの滝の 音まきゝて おいはすき志からの

くすりかり 君かやちよを わかえつゝみむ
君か世に逢坂山のいはし水こかくれたりとおもひけるかな
冬のなかうた
凡河内みつね
ちはやふる 神な月とや けさよりは くもりもあへす
うちしくれ 紅葉とゝもに ふるさとの よしのゝ山の
山あらしも さむく日ことに なりゆけは 玉のをとけて
こきちらし あられみたれて 霜こほり いやかたまれる
庭のおもに むらむら見ゆる 冬くさの 上にふりしく
しら雪の つもりつもりて あらたまの 年をあまたも
すくしつるかな
七条のきさきうせたまひにけるのちによみける
伊勢
おきつなみ あれのみまさる 宮のうちは 年へてすみし
いせのあまも 舟なかしたる 心ちして よらんかたなく
かなしきに 涙のいろの くれなゐは われらかなかの
時雨にて 秋のもみちと 人々は おのかちりちり
わかれなは たのむかけなく なりはてゝ とまるものとは
花すゝき 君なき庭に むれたちて 空をまねかは
はつかりの 鳴わたりつゝ よそにこそみめ

旋頭哥

題しらす　　読人不知

うちわたすをち方人にもの申すわれそのそこにしろくさけるはなにの花そも

返し

春されはのへにまつさくみれとあかぬ花まひなしにたゝなのるへき花のなゝれや

題しらす

はつせ河ふるかはのへにふたもとあるすきとしをへて又もあひみむ二もとあるすき

貫之

きみかさすみかさの山のもみちはのいろ神な月しくれの雨のそめるなりけり

誹諧哥

題しらす　　よみ人しらす

梅の花みにこそきつれ鶯のひとくひとくといとひしもをる

素性法師

山吹の花いろ衣ぬしやたれとへとこたへすくちなしにして

藤原敏行朝臣

いくはくの田をつくれはか郭公してのたをさをあさなあさなよふ

七月六日たなはたの心をよみける
藤原のかねすけ
いつしかとまたく心をはきにあけてあまの河原をけふやわたらん
返し　凡河内みつね
むつこともまたつきなくに明ぬめりいつらは秋のなかしてふよは
僧正遍昭
秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花もひと時
よみ人しらす
秋くれは野へにたはるゝ女郎花いつれの人かつまてみるへき
秋霧のはれてくもれは女郎花花の姿そみえかくれする

花とみてをらんとすれは女郎花うたゝあるさまの名にこそ有けれ
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
在原むねやな
秋風にほころひぬらし藤袴つゝりさせてふきり〳〵す鳴
あすはるたゝむとしける日となりの家のかたより
風の雪をふきこしけるをみてそのとなりへよみて
つかはしける　清原ふかやふ
冬なからはるのとなりの近けれは中かきよりそ花はちりける
題しらす　よみ人しらす
いそのかみふりにし恋の神さひてたゝるに我はいそねかねつる

枕よりあとより恋のせめくれはせんかたなみそとこ中にをる

恋しきかかたもかたこそ有ときけたてれをれともなき心ち哉

ありぬやとこゝろみかてらあひ見ねはたはふれにくきまてそ恋しき

みゝなしの山のくちなしえてし哉思ひの色のしたそめにせん

足引の山田のそほつおのれさへ我をほしといふうれはしき事

きのめのと

ふしのねのならぬ思ひにもえはもえ神たにけたぬむなし烟を

きのありとも

あひ見まくほしはかすなく有なから人に月なみまとひこそすれ

小野小町

人にあはん月のなきには思ひおきてむねはしり火に心やけをり

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

藤原おきかせ

春霞たなひく野への若なにもなりみてしかな人もつむやと

よみ人しらす

思へともなほうとまれぬ春霞かゝらぬ山のあらしとおもへは

平貞文

春の野のしけき草葉の妻恋にとひたつ雉のほろゝとそ鳴

きのよしひと

秋の野に妻なき鹿の年をへてなそわか恋のかひよとそ鳴

みつね

蝉のはのひとへにうすき夏衣なれはよりなむものにやはあらぬ

たゝみね

かくれ沼の下よりおふるねぬなはのねぬなはたゝしくるないとひそ

讀人不知

ことならは思はすとやはいひはてぬなそ世中のたまたすきなる

思ふてふ人の心のくまことにたちかくれつゝみるよしもかな

おもへとも思はすとのみいふなれはいなや思はし思ふかひなし

我をのみ思ふといはゝあるへきをいてや心はおほぬさにして

我を思ふ人をおもはぬ報にや我思ふ人の我をおもはぬ

一本ふかやふ

思ひけむ人をそともに思はましまさしやむくいなかりけりやは

一本よみ人しらす

出てゆかむ人をとゝめむよしなきにとなりの方にはなもひぬなむ

紅にそめし心もたのまれす人をあくにはうつるてふなり

いとはるゝ我身は春の駒なれやのかひかてらにはなちすてつる

鶯のこそのやとりのふるすとや我には人のつれなかるらむ

さかしらに夏は人まねさゝの葉のさやく霜夜をわかひとりぬる

平中興

逢事の今ははつかになりぬれは夜ふかゝらては月なかりけり

左のうたいまさる歟

もろこしのよし野の山にこもるともおくれんと思我ならなくに

時平

こひしれ思あさ夕の上乃あさま人の心をみて待やまし歟

伊勢

難波なるなかゝらの橋もつくるなり今は我身を何にたとへん

よみ人しらす

まち合しこゝろはうしとかたりの乱ておもひあしくなる

たきゝ頌

何乃なのつゝ川しの惜りん与帯としてゆふは我宿とや

いとこ盛けるやとこまよひ来て人の心はそれは

くろ

よるの我身にいとのまるとみえてかはりにまさるかや

讃しれ　さぬき

禄きことのまよひやしらそめてなけれは物をかねぞ見

人補

なけきこそしぬる盛せ我は思のまさりつゝ紙

よみ人しらす

なけきをはこのよのみつる見はの山のいなく盛思へらや

人ならしよみをもよしにおもひてあふに竹をのしる紀

よゐのまにいてゝ入ぬるみか月のわれて物おもふころにもある哉

そへにとてとすれはかゝりかくすれはあないひしらすあふさきるさに

世中のうきたひことに身をなけはふかき谷こそあさくなりなめ

在原もとかた

世中はいかにくるしと思ふらんこゝらの人にうらみらるれは

よみ人しらす

なにをして身のいたつらにおいぬらん年の思はんことそやさしき

おきかせ

みはすてつ心をたにもはふらさしつゐにはいかゝなるとしるへく

ちさと

しら雪のともにわか身はふりぬれと心はきえぬ物にそ有ける

よみ人しらす

梅の花さきての後の身なれはやすきものとのみ人のいふらん

法皇にしかはにおはしましたりける日さるやまのかひにさけふといふことを題にてよませ給ひける

みつね

わひしらにましらななきそあしひきの山のかひあるけふにやはあらぬ

よみ人しらす

世をいとひこのもとことにたちよりてうつふし染のあさきぬなり

古今和歌集巻第二十

大哥所御歌

おほなほひのうた

新しき年の始にかくしこそ千とせをかねてたのしきをつめ

日本紀にはつかへまつらめよろつ代まてに

ふるきやまとまひのうた

しもとゆふかつらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆるかな

あふみふり

あふみよりあさたちくれはうねのゝにたつそ鳴なる明ぬこの夜は

みつくきふり

水くきのをかのやかたに妹とあれとねてのあさけの霜のふりはも

しはつ山ふり

しはつ山うちいてゝみれはかさゆひの嶋こきかくるたなゝしをふね

神あそひのうた

とりもののうた

神かきのみむろの山のさかき葉は神のみまへにしけりあひにけり

霜やたひおけとかれせぬさかき葉のたちさかゆへき神のきねかも

まきもくのあなしの山の山人と人もみるかに山かつらせよ

み山にはあられふるらし外山なるまさきのかつら色つきにけり

陸奥のあたちのまゆみわかひかは末さへよりこしのひ〱に

わかゝとのいた井のし水さとゝをみ人しくまねはみくさおひにけり

ひるめのうた

さゝのくまひのくま河にこまとめてしはし水かへかけをたにみん

かへしものゝうた

あをやきをかたいとによりて鶯のぬふてふかさは梅の花かさ

まかねふくきひの中山おひにせるほそたに河の音のさやけさ

この哥は承和の御へのきひのくにのうた

美作やくめのさら山さらさらにわか名はたてしよろつ代まてに

これは水のをの御へのみまさかのくにのうた

みのゝ国せきのふち河たえすして君につかへんよろつ代まてに

これは元慶の御へのみのゝうた

君か代はかきりもあらしなかはまのまさこのかすはよみつくすとも

これは仁和の御へのいせのくにのうた

大伴くろぬし

あふみのや鏡の山をたてたれはかねてそみゆる君か千とせは

これは今上の御へのあふみのうた

東歌

みちのくうた

あふくまにきりたちくもりあけぬともきみをはやらしまてはすへなし

みちのくはいつくはあれと塩かまの浦こく舟のつなてかなしも

わかせこを都にやりて塩竈のまかきの島のまつそこひしき

をくろさきみつのこしまの人ならは都のつとにいさといはましを

みさふらひみかさと申せみやきのゝこのしたつゆはあめにまされり

もかみ河のほれはくたるいな舟のいなにはあらすこの月はかり

君をおきてあたし心をわかもたはすゑの松山浪もこえなん

さかみうた

こよろきのいそたちならしいそなつむめさしぬらすなおきにをれ浪

ひたちうた

つくはねのこのもかのもにかけはあれと君かみかけにますかけはなし

つくはねのみねのもみちは落つもりしるもしらぬもなへてかなしも

かひうた

かひかねをさやにもみしかけゝれなくよこほりふせるさやの中山

甲斐かねをねこし山こし吹風を人にもかもやことつてやらん

伊勢うた

をふのうらにかたえさしおほひなるなしのなりもならすもねてかたらはん

冬の賀茂のまつりのうた　藤原としゆきの朝臣

ちはやふるかものやしろのひめこ松よろつ世ふとも色はかはらし

家々稱證本之本乍書入以墨滅哥今別書之

巻第十　物名部

ひくらし　　いしゆき

すまへは家むこゑの上にやすたにもくにこそあり

右郭公下空蟬上

勝負

かくわくたまひのうまひきをえてくいかのかこ藤のおはせ

そのこ風乃木本則下

くれのおも　　いしゆき

あはしふいそ秋夕霧のおもいそよのとみえしるらん

忠岑利貞下

そきの井にやこう風

そのこしよう

そこの井にあはやくもおもふまにこしまへの霜織ぬり

かこし清行下

うめよの　おける

あやもち

うきよはにしのとうの秋はても雨はいはしのはま

この水のその見しのかみのまのあい

えうけりまつはりける雨もは見ゆ

桂宮下

巻第十一

奥山菅根しのきふる雪下

けふ人をこふる心は大井河なかるゝ水におとらさりけり

わきもこにあふさかの山のしのすゝきほにはいてすも恋わたるかな

巻第十三

こひしくはしたにをおもへ紫下

いぬかみのとこの山なるいさや川いさとこたへよわかなもらすな

この歌ある人あめのみかとのあふみのうねめに

たまへると

返し

うねめのたてまつれる

山しなの音羽の滝の音にのみ人のしるへくわかこひめやも

巻第十四

おもふてふことの葉のみや下

そとほりひめのひとりゐてみかとをこひ

たてまつりて

わかせこかくへきよひなりさゝかにのくものふるまひかねてしるしも

深養父恋しとはたか名つけゝむことならむ下

道しらはつみにもゆかむすみの江の岸におふてふ恋わすれ草

貫之

[illegible]

古今和歌集序　紀淑望

夫和歌者託其根於心地發其花於詞林者也人之在世不能無為思慮易遷哀樂相變感生於志詠形於言是以逸者其聲樂怨者其吟悲可以述懐可以發憤動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於和歌倭歌有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫春鶯之囀花中秋蝉之吟樹上雖無曲折各發歌謡物皆有之自然之理也然而神世七代時質人淳情

欲無分和歌未作逮于素盞烏尊到出雲
國始有三十一字之詠今反歌之作也其
後雖天神之孫海童之女莫不以和歌通
情者爰及人代此風大興長歌短歌旋頭
混本之類雜體非一源流漸繁譬猶拂雲
之樹生自寸苗之烟浮天之波起於一滴
之露至如難波津之什獻
天皇富緒川之篇報太子或事關神異或
興入幽玄但見上古歌多存古質之語未
為耳目之翫徒為教誡之端古
天子每良辰美景詔侍臣預宴筵者獻和
歌君臣之情由斯可見賢愚之性於是相
分所以隨民之欲擇士之才也自大津皇
子之初作詩賦詞人才子慕風繼塵移彼
漢家之字化我日域之俗民業一改和歌
漸衰然猶有先師柿本大夫者高振神妙
之思獨步古今之間有山邊赤人者並和
歌仙也其餘業和歌者綿々不絕及彼時
變澆漓人貴奢淫浮詞雲興艷流泉涌其
實皆落其花孤榮至有好色之家以此為

花鳥之使乞食之客以此為活計之媒故
半為婦人之右難進大夫之前近代存古
風者纔二三人然長短不同論以可弁華
山僧正尤得歌体然其詞花而少実如図
画好女徒動人情在原中将之歌其情有
余其詞不足如萎花雖少彩色而有薫香
文琳巧詠物然其体近俗如賈人之着鮮
衣宇治山僧喜撰其詞花麗而首尾停滞
如望秋月遇暁雲小野小町之歌古衣通
姫之流也然艶而無気力如病婦之着花

粉大友黒主之歌古猿丸大夫之次也頗
有逸興而体甚鄙如田夫之息花前也此
外氏姓流聞者不可勝数其大底皆以艶
為基不知歌之趣者也俗人争事栄利不
用詠和歌悲哉悲哉雖貴兼相将富余金銭
而骨未腐於土中名先滅於世上適為後世
被知者唯和歌之人而已何者語近人耳
義慣神明也昔平城天子詔侍臣令撰
万葉集自尓以来時歴十代数過百年其
後和歌弃不被採雖風流如野宰相

情如在納言而皆以他才聞不以斯道顕
陛下御宇于今九載仁流秋津洲之外恵
茂筑波山之陰淵變為瀬之聲寂々閉口
砂長為巖之頌洋々満耳思継既絶之風
欲興久廢之道爰詔大内記紀友則御書
所預紀貫之前甲斐少目凡河内躬恒右
衛門府生壬生忠岑等各献家集并古来
舊歌曰續万葉集於是重有詔部類所奉
之歌勒為二十巻名曰古今和歌集臣等
詞少春花之艶名竊秋夜之長況哉進恐
時俗之嘲退慙才藝之拙適遇和歌之中
興以楽吾道之再昌嗟乎人丸既没和歌
不在斯哉于時延喜五年歳次乙丑四月
十八[五]日臣貫之等謹序